（第三種郵便物認可）（大正八年一月十五日印刷）[illegible]
（大正八年一月[illegible]）
5—1

男女貞潔之理想　會長　島田三郎

公娼廢止之主張　副會長　安部磯雄

廓清

文明改造號

第九巻第一號

東京　廓清會本部　發行

ライオン齒磨（はみがき）



茲に光輝ある新年を迎へて
大方各位の御清福を奉祈候

舊年中は深大の御同情を賜はり弊店組織の變更、販路の擴張、工場及び試驗所の完備等悉く感激に堪へざる儀に御座候
隨つて ライオン齒磨 ライオン石鹼 製品各種愈向上して日に月に世界の信用を高め店員一同努力報謝の一念に充實致居候次第重ねて御禮申上候
頓首再拜

大正八年一月元旦

ライオン齒磨 ライオン石鹼 本舖 株式會社 小林商店

本舖 東京市本所區外手町
支舖 大阪市東區博労町
地方倉庫 名古屋市西區桑名町



清廓
THE PURITY

大正八年一月

第九卷第一號



□□□　文明改造號發刊の辭　□□□

萬里和平、人道の光り始めて赫々たる大正八年の新春は來りぬ。今年は人文史上に一期を劃する最も重大なる時代にして、所謂オートクラシーの物質文明より、デモクラシーの精神文明に入るの第一年也。吾人は今、文明改造の大轉期初頭に立ちて、思ひを過去幾千載に馳せ、文化興亡の跡を繹ね、靜に諸君と共に將來幾萬年、人類の福祉國家の隆昌を祈念翹望せむとす。

吾人を以てすれば、今日の問題は、國際聯盟より大なるはなく急なるはなし。而も今は其の絶好の機會にあり。大戰後に於ける重大問題は、勞働問題其一なり、婦人問題其一なり、殖産興業其一なり、敎育問題生活問題元より共に其一なり。されど此の千載一遇の機會を捕へ、國際聯盟の成立を見むか、各國の均しく苦しみつゝありし尨大なる軍費は割いて、敎育、衞生、産業其他百般の施設となり、勞働問題、婦人問題、乃至男女風敎の問題も、刄を迎へて解くるが如く一大進展を見るべきや必せり。

曩に米價暴動によりて成立したる現内閣が、尚今日何等施す處を知らざるに顧みるも、人類悠久の問題人生福祉の大理想に對して、什麽の抱負と成竹とを有するや、最も警戒を要する處なるが、更に顧みて我國百般の文物制度に及ばゞ、世界改造の大機運と相對して、憮然として悲しみ慄然として恐れざるを得ざる也。

即ち是吾人が新春劈頭敢て文明改造號を刊行する所以(江南)



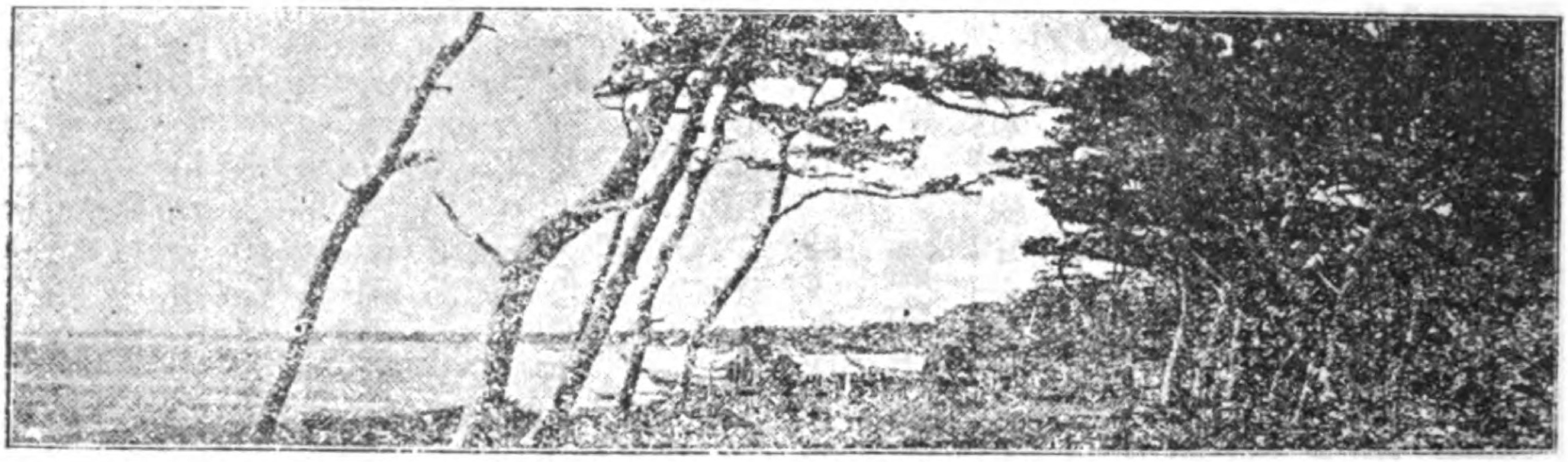
文明改造の政治的方面

廓清會長　島田三郎

□年頭先づ回顧す維新の改革

維新を距る五十二年、顧みて日本內部の大勢を見るに、維新改革當初は、開港の後を受けて世界の大勢に順應するの必要に迫られた。封建制度は戰爭時代の餘を受けた軍人氣質の制度なるが故に嚴重なる階級維持の制度であつた。將軍が總大將であり大名が部將であり其下に武士があつて、以上が主治者の階級であつた。特權と位置とを占めて他の農工商に對した有樣は、殆んど人種の別異あるが如き嚴正なる區別があつて、且其職業にも自然の種類が互に種族を作つて容易に其階級種族を脫し得ない有樣であり、其狀稍印度のカースト制度に似て居た。但し彼は宗教の信念より來り、我は戰時の狀態より起つたが。兩ながら容易に拔く可からざる階級制度たることは類似して居つた。

之を打破せねば世界列國に對する勢力を作る能はずとの外交より得たる觀念が、當時に於ける現狀打破の動機となつて、維新初期の大改革は成就し、一君を頂いて萬民其下に天然の力を伸ぶるの自由を與ふる如き、日本の歷史に比較なき變革が現はれた。餘勢を驅つて凡ての國民に同一の權利と責任とを負はしめる改革は、二つの大なる法令となつて現はれた。一は即ち教育令の發布にして、これ迄教育の利益を拒絕された人民に令して國民たる可き教育を子女に授く可しとの義務を父母に課した。他は即ち徵兵令であつて、從來武士階級が內亂外寇に對し國家防衛の請負をなし來つたが、此發令によつて武士は士族の名のみに止めて其特權は廢せられ、國民悉く國防の責任を分つと共に此點に於て義務に伴ふ同等の權利を得る事となつた。續いて女學獎勵の氣風が起り、これ迄男子すら武士以外には一般に教育を與へなかつたのが、教育の門戶を女性にも開く事となり、是等の勢ひの至る處平等の觀念を養ひ人民を公民として扱ふ權利均等の精神が現はるゝに至つた。



□潑剌たる進運頓挫の原因奈何

併し乍ら是等の改革は歷史上の遠き發展によつて人民の內心に成長し來つたる結果に非ずして、少數の識者が發意して武士以上の支配階級を驅て行はしめたる改革であるから、一時は其精神極めて振ふたやうに見へたが、時の經過するに從ひ當時靑年壯年の改革者は其意氣年と共に衰へ、先に急進家と見えた人が次第に保守的氣象を帶び來り、時勢が此儘に進み行かば危險を萠す事なきやとの取越し苦勢をするやうになつた。

徹底した識者の眼を以て見るに近代の日本卽ち維新以前の狀態は固有の狀態ではない、封建制度は政權が武門に落ちて以來の產物て、戰國の時互に封土を爭ふて之を防禦するが爲に戰士を貯へ、勇士を特待するの慣習から起つたもので、日本古來の風習てはない。上世に遡れば極めて簡易て、上に一君を頂いて萬民是れに奉仕する。能力を廣く採つて更に人物を海外歸化の人から擧ぐる迄の時代もあつた程て、德川時代に見た階級制度は決して日本固有のものてはないのてある。つまり世界の大勢に應じて此改革をなした事は、恰も中古支那の文明に接し大化の改新を行つて其以前の門閥階級を打破したる改革と同一轍てある。

君民の關係嚴肅なると同時に上下の情誼親密てあつて、君は民を愛し民は君を敬するの秩序が亂れず、斯くして民意の暢達を期するが皇道てあると信ぜらるゝ時代に遡つて、明治の革新を觀れば、當時の階級を廢して萬民一君を頂くの制度は、一方から見れば歐米の大勢に促さるるのてあるが、他方から視れば古代の制度を恢復したものと觀てよい。而して此制度に應ずる敎育を國內に普及せしめて廣く人才を採り、階級に拘束せられぬ時代の要求を達することは、何等危險を招くなどの氣遣はなかつたのてあるが、不幸にして前途を達觀する識見を缺いた方針が、改革の精神衰へた政治家の胸中に沸いた。蓋し是れ維新の精神衰へ潑剌たる進運を頓挫せしめたる原因てある。

□政治上に於ける獨逸主義の侵入

されど是等の政治家も單に自己の意見を以て大勢を動かすの難きを知つて、其の範を外國に求めんと企てたが、偶々明治四年歐羅巴に於ける普佛戰爭の結果は、我封建制度を廢して郡縣統一の政治を

確立したと同樣のものが歐羅巴に現はれた。而も其成功は主として武力に由るものであつて、其武力に伴ふ諸制度が武權文權の二本位の政治であるから、舊歩門が倒れて新に武人の勢力を得た我國の政治家は、好適例を天の一方に得た心地して是に倣ふの氣風を生じた。卽ち形を憲法政治として幾分專制的氣風を加味する如き政治を便とするの心が起つた。是が政治的方面に獨逸の氣風を尊重する思想の一時旺盛になりたる根本原因であると思ふ。

斯くして世界の內に獨逸の勢力は隆々として起り、威力卽ち權利なりとの思想は、簡易率直且つ有力の效果があると信ぜらるゝに至つた。世界にも此信者があり、日本にも之を唯一の外援思想であると思ふ人が少からずあつた。政府の一方には此思想が絕えずあつて、民間に成長した君民同治の思想と並行し、時々衝突した現象は此處から來たのである。

□國內に對立する二思潮

古來無視せられたる人民の忽然として認識せられたる維新の改革は、新なる國民を生んだが、何にしても年代の淺い爲めに武士の後繼者たる官吏の權力は次第に强くなつた。明治の初期に福澤翁の如き人民の爲めに氣焰を吐く論者があつたが、時勢の遷移と共に反動發生し來れる官尊民卑の宿弊は少數論者の力を以て掃蕩すること能はず、官海に成立し來る官僚政治と、權力卽權利なりとの信者たる軍國主義崇拜者の勢力と相結んで、先に階級制度を打擊したる日本帝國は、新なる階級を製造するに至つた。如斯にして民間の氣風と官僚の氣風と對峙し、一進一退進步の氣運を遲鈍ならしめたのである。

民間に成長した思想は多く英米二國の教育的宗教的文學的社會的事業的思想から其感化を受けたものが多い。言語文章の上に於ては英語を通じて彼等二國の思想が民間に多く入込んだ、茲に於て日本國內の潮流は二道に分れ居ること恰も獨逸の思想と英米の思想と世界に對抗したやうな狀態が、特種の事情を以て日本の內部に並行し對抗しつゝあつた。

權力を握つて居るから目前の事實に於ては官僚は强く見ゆるが、自然に成長する思想上の感化は深くして、且此潮流に浴する人數も甚だ多いのである。殊に思想の容器たる言語は如何に官僚が沮止の方法を講ずるも防ぐとは出來ぬ。社會的宗教的に其言語に含まれたる自由の精神は、不知不識の間に國民の內に瀰漫した。丁度此時期に中歐の軍國主義の同盟國と、英米佛伊を連ねたる聯合國との對戰が起つて、其結果幸に聯合軍の大勝に歸した。而して今日の如く交通自在て、西班流行感冒症が世界を襲ふて東西兩球の諸國は此症の患者を出すが如き時代に於て、人類を平等視する思想が各國の民心を動かすことは必然の結果て、又軍國主義對自由主義の勝敗の結果は世界何れの國にも其影響を與へることは極めて大なるものであらう。日本は地勢に於て大戰の中心から隔つて居るけれども、日英同盟の深緣もあり、社交的に商業的に又宗敎的に敎育的に日米の關係は極めて親密であるから、日本の思想上に一大變革が現はれるのは必然であつて、世界の變革は卽ち間接に日本を變化せしめざれば止まぬてあらう。

□戰後社會上思想上の變化

具體的に現はるゝ世界の變化は、ベルサイユ會議の結果に待たねばならぬから確言することは出來ぬが、大體に於ては階級制度の打破、資本勞働の均衡、人類として男女を平等視する思想、人格を認めて凡ての國民に各自の責任あることを自覺せしむるの教育、威力卽權利なりとの迷信の打破、正義人道の觀念、平和的進步の尊重、人として獨立であり平等であれば人から組織せらるゝ獨立國は大小强弱に拘らず國として平等なるべしとの觀念、更に進みて人種を以て人格の輕重をなすべからずとの主張等、皆此の大戰の結果として現はれ來るであらう。

既に具體的に主張せらるゝ處によるも、國際の爭は力に決せずして理に決せんとする國際聯盟の說の如き、婦人に參政權を與へる事の如きは英米に既に現出して居る。兵備を減じて國際の警察力に止めやうとの主張も、戰勝國の有力なる政治家によつて唱へられてゐる。一言すれば佛國革命以前に人の厭苦したる封建的階級區別は彼革命によりて破れたが、次て起りたる貧富の懸隔は久く識者の憂となつて居つたのを、今回の大戰以後此の救濟が目前の急として論ぜらるゝ傾向がある。

あらゆる弊害を除くには首として人々に教育の利益を得せしめて新世界に應ずる新人を作らねばならぬ。差當り必要なる改革は、從來世界軍事の競爭の渦中に餘儀なく捲込まれて止むを得ず夥多の軍費を要したが、形勢一變して內亂を鎭める必要の軍備と國際の警察力とも見るべき軍備とに止めて、國費の一大節減を得る事となれば、之を農工商業の發達に用ふるとが出來る。又體力を健全にする衛生の費用もそれから出て生活狀態の改善の費用もそれから出る、政治的に最も第一に來るべきは教育の程度を高め、凡ての人々に廣く教育の門戶を開き國民一般に其利益を受けしむる方法を立つるにある。其教育の目的は單に技術を敎ゆるに止まらずして、人たるの性格民たるの資格を成さしめて、自尊の精神責任の觀念を養ひ、法律の制裁を待たずして、各自其良心から不善を憎み善を樂しむことに至らしむることが、根本の要義であらう。

□導くに德、整ふるに禮

法治の文字は情實の文字に對して必要なる要義ではあるが唯法律によつてのみ良民を作り得べしと考へるのは、淺薄なる意見である。「是を導くに德を以てし是を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥づるなし」と孔子のいふたのは。人間萬事を法律や政治を以て治めやうとしても、外觀の惡を制するのみて良心に對しては何の力もない。之に反して「是を導くに德を以てし是を齊ふるに禮を以てすれば、恥あつて且つ至る」と曰ふた。是は德と禮とを以て國を治むれば、惡をなすは恥かしいといふ良心の銳敏なる民を作ることが出來るといふ意見であつて、斯かる甚深なる觀念は道德の力に俟たねばならぬ。此道德を養ふには教育と宗教の力を要する。宗教は信仰の上に立つものであるが、政府が之に手を下すには餘り宏大深遠のものであつて、官吏が如斯問題の內容に立入るこ

とは百害あって一利なきものであるから、これは宗教家其人と民の信念に任ずるより途はない。唯政府は宗教に對する崇敬の心を持つべきである。

教育の方面は技術師を作る如き觀念でなく、形式的規則を守らしめるの手段で目的を達すべきものでもなく、心から道を守らしめ、隱れたる處に不正を行ふは人として耻づべきものなりとの根本の思想を與へねばならぬ。是れには人を養成するは名譽の事業なりと敎育家自ら感じて育英を終世の事業とする心と其能力ある人とを得ねばならぬ。今日は能力ある人希望ある人は足を敎育界に留めぬ程の薄遇を爲し、更に中央も地方も官吏や議員等が敎育家を極めて輕んずるの氣風があつて、敎育家は自己の識見を發揮する機會もなく、自ら重んずるの人々は是に留まることが出來ないのである。如斯にして青年を善化し眞に人格と良心とを重んずる國民を作り出すことは不可能である。

□戰後經營は敎育を第一義

平和の時代に國力を養ひ、有事の時代に國家の干城となる如き、治まつては紳士となり、亂れては鬪士となる如き有力な國民を作り出すには、善良なる敎育を必要とする。形式的な無精神の形容的熟語や聯絡なき事實や不合理の傳說や不可解の成文を暗誦せしめて愛國心を養ふことは出來ぬ。國民を作るには共同生活の價値を覺るの智識と連帶責任を感ずるの觀念とを養はねばならぬ。皇室の尊榮を合理的に理會せしむる敎育を施さねばならぬ。總べての問題に關し單に傳說のみを口授するが如き敎育は、斷じて現代の人心を信服せしむるの力なきを感ずるのである。

之を要するに憲法政治を維持するには、憲法政治を保持するに適する國民を作ることが必要である。合衆國の國祖ワシントンは其退職告別の演說に『敎育の普及を以て米國の基礎を固うすべしと』訓諭した。國體の如何に拘らず此の訓諭は凡ての國に不磨の金言である。此訓諭を實行したる米國は今回の大戰にも、人民が其國情を理會して居たから見事なる擧國一致が出來た。日本國民も敎育の力により日本の國情を理會するによつて、國礎は益々固きを加ふるのである。

然るに從來の敎育は何人をして評せしむるも、多くの場合に於て敎育者其人を得ざることとてある。我が爲す處に倣へと自信する敎育家を得ることが難かつた。從つて敎育其物が單に敎科書の朗讀や、暗誦をなさしむるに止まつて、精神的に血となり肉となり骨となり以て兒童の身體を組織するの敎育となつて居らぬ。今後の一大改革は世界の大勢を察し、國體の根據を理會して此大勢に應ずべき人物を作り出し、社會改造の大機運に後れざるやうせなければならぬ。

大正八年を迎へて、會員諸君の健康を祝すると共に、諸君と一層共同の團結を堅くして理想の實現に努めたいと思ふ。

新年會員懇談會開催

來る二十五日頃新年會員懇談會を開く豫定なれば出席希望者は二十二日頃電話にて本部へ御問合を乞ふ

文明改造の經濟的方面

早稻田大學長
經濟會評議員　法學博士　平沼淑郎

□デモクラシーの歴史

今回の歐羅巴の大戰は、要するにデモクラシーがオートクラシーに對して爭つたと云ふことに外ならぬ。其の結果、デモクラシーが勝利を得たのである。抑もデモクラシーがオートクラシーに對抗することは、今日に始まつたのではない。既に古へよりあつたとてある。デモクラシーと云ふ語は遠く既に希臘の歴史に見えてゐる。希臘に於いて其の最も盛んであつたのは、指をペリクリースの時代に屈するのである。希臘は數多の獨立した都會より成立つた國であつて、各都會が政治上デモクラシーの主義を實行してゐた。理想としては、都會の市民が悉く政治に參與することになつてゐたのである。しかしながら、實際の上に於いては、種々なる制限があつた。デモクラシーの最も盛んであつたペリクリースの時代に在つても、住民の多數を占めてゐた所の奴隷が、其の權利を享有することを得てゐなかつたのみならず、市民の資格にも亦非常な制限があつて、都會の人悉く政治に參與すると云ふ理想は決して實現してはゐなかつた。且又實際の狀況を見ると、都會の住民に節制訓練がなかつた結果として、往々狂暴なる行動を敢てすることがあつたばかりでなく、醜陋を極めたる事件も頻々發生したのである。是の故にアリストーテレスの如き、其の政治論に於いて、デモクラシーの政治は一種の一揆政治暴民政治であるとまで極言してゐる。

斯くの如き狀態であつたが故に、各都會の住民は動もすれば野心家に煽動せられ、權謀術數の爲に飜弄せられた。斯かる弊は實際の上に屢々現はれたことであつて、其の結果は事實上少數の者に權力を掌握せらるゝことになつた。さればデモクラシーは其の源を希臘に發してゐるけれども、其の極は同じ希臘に於いて遂に少數の專橫に歸し了ると云ふことになつたのである。

羅馬に於いても、或る時代にはデモクラシーの政治を見たけれども、是れも亦希臘と同一の事由の爲に、少數者に權力が歸することゝなつた。野心家陰謀家權謀家術數家は各時代を通じて頻發して居る。羅馬の歴史は實に斯くの如き人々の行動を繰返して居るのである。

□民本的思想の發達と訓練

羅馬が亡びて、歐羅巴は暫く暗黑時代に入つてゐる。其の

間には、日本の中古と同じく、少數の權力者が政を專にし、又富を蓄へて、下層の民は無智蒙昧、殆んど何物をも辨へざる狀態に陷つて、壓迫の下に辛苦粒々傳來の業に從事してゐたのである。後、封建時代、戰國時代を經過して、國家が一統された。所謂群雄割據の世が變じて、君主專制の世となつたのである。君主專制と云つても、事實上に於いては、君主單獨に政權を左右することは不可能であつた。必ず其の側に少數の政治家があつて、實權を掌握してゐたのである。故に歐羅巴の或る學者の如きは、君主政治は畢竟寡頭政治であると論じてゐる。此の說は、事實から見て、否定することを得ない。

少數の人が權力を掌握するに至つても、國民が從來の如く無智蒙昧の境遇に安んじてゐた間は、何事もなかつた。又政治に鞅掌する所の人が賢明なる政治家であつて、國利民福を主眼として政を行つてゐた間は、國家は安泰であつた。斯くの如き時代を歐羅巴に於いて文明的專制時代と稱したのである。然るに、世が變じ時が移つて、上に立つもの必ずしも賢明なるものでなく、必ずしも國利民福を旨とするものでなく、或は庸暗なるものにして權力を弄ぶこともある、佞姦なるものが私腹を肥すが如きことも起る。是の時に當りて、國民が自覺し來るならば、到底此の狀態を維持し得ないことは明かであつて、必ずや反撥が起る、必ずや權力の爭奪が生ずるのである。

國家觀念が發達すれば、茲に政治の根本に涉つて大なる議論を生ずる。議論は時を經るに從つて、更に實地の行動となる。歐羅巴に於いては革命が屢々起つてゐるが、革命は何てあるか。少數の橫暴なる權力家に對しての反撥に外ならぬ。近世の初より今日に至るまでの歐羅巴の歷史は、自覺せる國民が、デモクラシーの理に依つて、少數者の專橫に對抗する運動を以て其の特質としてゐる。是れが歐羅巴の大勢である。獨逸の如き、墺地利の如きも、デモクラシーの思想は夙に國中に瀰漫してゐたのである。英吉利の如き佛蘭西の如きは業に已にデモクラシーの最も極端なる時代を經過してゐるのであるが、獨逸及墺地利に於いては、其の精神の將に漲らんとしつゝある時に際し、非常な壓迫を加へた結果、今日までオートクラシーを維持し來つたのである。然るに、端なくも今回の戰爭によつて、反撥の力が非常に强大となつた。從前壓迫の力が强かつただけそれだけ、反撥の力も亦大なるものがあつて、僅に一日の間に從來の政體を轉覆し了つたのである。しかし此の際に於いて注意すべきことがある。均しくデモクラシーの思想が漲つてゐても、節制あり訓練ある國民と、さもない國民との間には非常な徑庭がある。獨逸の國民の如きは今日まで聊か訓練を經てゐる。故に今回の政變も比較的穩健に行はれてゐる。獨逸國其のものを覆滅するが如き行動は敢てしてゐない。之れに反して、露西亞の如き、デモクラシーの眞の思想は國中少數なる有識階級の間に傳はつてゐるのみであつて、國民の多數は何等の節制も何等の訓練もない。かるが故に、今日の如き土崩瓦解、容易に收拾すべからざる狀態を呈してゐるのであつて。頗る危險と謂はねばならぬ。是に於いてか、斯う云ふ結論を生ずる。歐羅巴の大勢は常

にデモクラシーに向つて進行しつゝあるが、眞のデモクラシーは節制訓練と相俟つて、而して始めて實現し得るのである。節制訓練ある國民はデモクラシーの爲に國を危くすることはないが、然らざる國民は其の爲に國家の壞亂を來す。斯う云ふことに歸着するであらうと思ふ。

□宗教上に於ける民本主義

以上は專ら政治に就いて、デモクラシーの事を述べた。しかしながらデモクラシーは政治上の事に止らない。今日は頗る廣大なる意義を有してゐる。宗教上のデモクラシーもある。經濟上のデモクラシーもある。社會進步、國家發達の跡を繹ねて見ると、宗教も經濟も、何れも政治と共にデモクラシーに向つて進んでゐることを看取するのである。けれども、運動の中心點は、時勢によつて異つてゐる。先づ第一に來るものは宗教上のデモクラシーに關する問題である。

或る一つの宗教が權力を奮つて、全國若しくば世界の精神界を左右せんとする時に當つては、必ずや之れに反抗して平を得んとする所の宗教的運動が起る。例へば、日本に於いて天台宗が獨り權力を專らにしてゐると云へば、禪宗とか、或は其の他の宗派が之れに對抗する。是れ皆平を得んとする運動である。始めは叡山が唯一の勅願所であつたが、其の後に各宗の寺院に勅額を賜はるといふことになつて、是に於いて宗教界も平均を得て、紛爭が稍少くなつた。斯くの如く、宗教界に於いても、平を得んとする運動が起る。是れが卽ち宗教上に於けるデモクラシーの運動である。歐羅巴では、嘗てローマン●カトリツク教會が獨り權力を專らにして、其の結果は往々道德上如何はしき事が起つた。之れに對して、プロテスタント教が起つて、新舊兩教の間に激烈なる爭を生じて遂に血を流すの慘劇を演ずるに至つた。しかし、今日は宗教の自由は到る處に認められて、宗教上のデモクラシーが實現してゐる。

順序として、其の次に來るのが政治上のデモクラシーである。政治上のデモクラシーも、前に述べた如く、平を得んとする所から生ずるのであつて、少數者が權力を專らにするに對して、國民が及ぶ限り之れを平均せんとするから起るものである。英國の憲法史を見ると、マグナ●カルタは憲法の起源と云はれてゐるが、是れは何であるか。其の頃の貴族が國王の專橫を憤つて、之れに對して、其の階級に權利を保障せしめたのが起源である。是れは國民全體に干涉したものではなかつたけれども、亦一種のデモクラシーである。日本の歷史を見ても、藤原氏が專橫になれば、之れに反抗して、地方の豪族が起つてゐる。是れ亦平を得んとする運動である。歷史は常に之れを繰返して、其の結果遂に近世憲法の成立を見るに至つたのである。我が憲法政治は今日まだ有終の美を濟すに至つてはゐないが、デモクラシーの理想は半實現してゐる。普通選擧の如きも、何時かは行はるゝであらうが、是れもデモクラシーの實現である。

宗教たると政治たるとを問はず、眞のデモクラシーを實現せしむるには、前に述べた節制訓練が必要である。宗教に就いて見ても、一つの宗教に對して起つた所の他の宗教が、甚

しき迷想謬見の爲に、國家の治安を害するか、又は風敎を紊すものであるならば、縱令專横なる宗敎に對抗するものとしても、却つて害がある。輓近政治上に於ける露西亞の如きと擇ぶ所がないのである。宗敎も、政治も、要するに節制訓練と相俟つて、始めてデモクラシーの理想を實現し得るのであつて、其の節制訓練こそ第二十世紀に於いて大いに修養すべき事業であると思ふ。

□上古中世迄の經濟生活の變遷

第三の經濟上のデモクラシーも亦同一の理に由るものである。此の事に就いては、古に遡つて叙述せねばならぬ。古代の社會は共財同居と云つて、私有財產はなかつた。日本の大寶令を見ても、私有財產の制度は明かでない。唯奴婢又は家畜の如き動產の私有を認めたに過ぎなかつたらしい。古の共財同居主義は形を變じて、依然傳はつてゐたものゝ如く見える。

大古は氏と云ふものが社會の單位であつて、土地は勿論其の他の財產は皆氏の共有に屬してゐたのであつた、當時の社會組織では、私有財產の存在すべき理由がなかつたのである。然るに、大化の改新に至つて、氏が法律上の存在を失つて、戸が社會の單位として認められた。しかしながら、全國の土地は、法律上、悉く天皇の御所有となつたのであつて、戸には私有權はなく、たゞ土地の用益權を賦與せられたるに止まつたのである。故に大化の改新以後、六年班授と云ふ制度があつて、六年毎に各戸に土地を分配して、其の收獲の一部分を租税として納めしめたのである。されば土地の私有權はないのである。前に述べた如く動產を除いては、財產は私有を認めてゐなかつたのである。

然るに莊園の制度が行はれるに至つて、茲に土地の私有が現はれて來た。卽ち豪族が大所有地を有するに至つて、權力ある所の人は廣大なる莊園を有した。平氏の莊園の如きは、天下に半すと史上に見えてゐる。莊園が發達するに從つて、茲に社會的に經濟的に大なる變化を生じたのである。土地の用益權を與へられてゐる國民は、天皇に直屬する自由民であつて、莊園の民とは趣を異にしてゐるのであるが、莊園の領主に隷屬する民は時を經るに從つて非常に增加した。是れは何故であるか。朝廷御直轄の土地は、年々負擔が重くなつて、且朝廷の紀綱が弛んだと共に保護が十分に行屆かなくなつた。之れが爲に農民は爭つて身を莊園に投じたのであつた。莊園では負擔が輕い、且莊園の領主は勢力扶植の爲に競つて民を歡迎したのである。さうして領主は直接に保護を與へた結果、交換條件として、領主の爲に兵役に從事するの義務が生じた。又糧食を供給する爲に貢租を納むるの義務が生じた。卽ち領主の爲に身命を抛つか、さもなくば租税を納めて領主の政務軍事上の用に供するのである。而して、此れ等の民は悉く領主の臣隷となつたのである、是れが歐羅巴の所謂サーフに適合する。故に此の時代は歐羅巴の或る學者の所謂サーフ・エコノミーの世である。

□近世に於ける經濟的變動

是れから以後、富力は少數者の獨占する所となつた。所謂豪族は漸次富力を蓄積して、其の他の國民はこれに使役せらるゝ形勢を馴致するに至つた。是れ實に社會的に云つても、經濟的に云つても、大なる變動であつて、遂に封建制度の源をなしたのである。而して封建制度の結果は亦富力を少數者の手に集中し了つたので、富力の平均は望まれぬことゝなつた。領主は土地の經營其のものには直接に干渉しないけれども、其の土地に對して租稅徵收の權力、其の他軍事上政治上司法上の權力を握つてゐたから、從つて富を左右することをもなし得たのである。而して領主の側には、之れを補佐翼賛する所の少數の權力者があつて、是れが又政治上經濟上權力を掌握したのである。故に富は漸次少數者の手に歸して、國民全般は實に憫むべき貧窮の境遇に沈淪した。殊に其の當時農民の狀態を見ると、殆んど人間としての生活をしてはゐなかつたと謂つて不可はない。しかし國民は自覺心が進んでゐなかつたからして、皆之れに安んじてゐた。是れが近世の初期に至るまでの狀態である。

しかしながら、此の際に於いても、デモクラシーの潮流は現はれてゐた。莊園制度は、歐羅巴に於いても、日本と殆ど同一の形態を以て現はれたものであつて、時を經るに從ひ、農民と領主と非常な軋轢を生ずるに至つた。是れは農民の自覺に基いたものであつて、歐羅巴史で有名なる農民戰爭は即ち是れである。しかして此の農民戰爭が屢々起つた結果、領主と農民との調和が生じた。即ち領主に對する農民の納稅額を增加して、其の交換條件として、種々なる人的權利を農民に賦與した。事の茲に至るまでには、迂餘曲折はあるが、しかし畢竟農民の人的權利が增加したのである。是れ社會が幾分デモクラシーの方面に向つた證據である。

第十八世紀產業革新の世に至つては、機械の發明、產業組織の改變、交通運輸の發達、工場制度の變革は幾多經濟上の大變動を來したと共に社會的大回轉を生じた。產業革新と共に從來特權を得てゐた富豪と、從來壓迫せられてゐた國民とは往々地位を顚倒するに至つた。昔はギルドと云つて、專賣の商工業組合があつて、是れが各經濟上の事業を獨占してゐたが、產業革新と共にギルドの支配を受けない大工業大商業が起つた爲に、從來ギルドの會員として經濟力を專占してゐたものが地位を顚倒して、却つて新に起つたものに使役せられると云ふが如き大變調を生じた。是れ實に一大變遷であつて、斯くして經濟上の門閥門地が悉く破壞されたのである。

□經濟上より來る道德の變化

是に於てか、力ある者は奮起して、富力と蓄積し得る機會が生じ來つた。是れ一面から云へば、古の獨占制度に對してデモクラシーの潮流が漲り來つたとも解し得らるゝ。しかし之れと同時に、又其の反對の結果をも生じ來つたのである。力あるものが富力を蓄積したけれども、其の力あるものは少數である。其の少數者が資本家となつて、他の多數は悉く之れに使役せらるゝ勞働者となつた。さうして其の間に道德上の變化が起り來つたのである。

昔のサーフ・エコノミー即ち直隸經濟時代には、報恩道德

を基礎とした主從の觀念が濃厚であつた。臣隷は領主の保護を受ける。茲に主の恩が生ずる。そこで此の恩に報ゆる爲に年貢を納め身命を抛つといふことになる。けれども、産業革新以來、此の主從關係は地を掃つた。從つて報恩道德も亦姿を消して、全く實力が世を支配することゝなつたのである。實力は進歩發達の爲に最も必要なことであつて、決して之れを拒否することを得ないけれども、富者益富み、貧者益貧なる社會狀態は之れが爲に一層强烈になつたのである。殊に此の經濟社會に於いては、營利經濟が根柢となつてゐる。是れも國利民福を主とするものであればとにかくであるが、私利に流れて、道德を蔑如するに至るのが其の趨り易い弊である。

斯ういふ形勢になると、資本主は全く私利を營むことにのみ汲々として、勞働者の休戚を全く度外視する。さまでてなくとも、之れを第二位に置くと云ふ傾向がある。勞働者其のものも亦節制なく規律なくして、徒らに富者の榮華豪奢を羨望し、猜疑嫉妬の念を以て之れに對するのである。是れが第十九世紀以來經濟社會の根柢に於ける大爭闘である。是れが經濟上に於けるデモクラシーの思潮を橫溢せしむるに至つた所以であつて、是に於いてか、社會政策問題が頻發し來つたのである。

營利經濟、實力萬能主義の結果、金力が少數の者に專有されることになると、茲に經濟上のオートクラシーが生ずる。從つて、之れに對抗するデモクラシーの爭が起つて、政治宗敎に於けると同一の潮流を生じ來るのは、當然の趨勢である。

しかしながら、デモクラシーは前にも述べた如く節制訓練を俟たなければならぬ。經濟上に於いても宗敎政治と同一である。節制なく訓練なきものがデモクラシーを主張すると、遂に狂暴醜陋に陷らざるを得ない。經濟社會の攪亂は延いて國家の治安を妨害するに至るのである。

□營利經濟は機會不均等

抑々デモクラシーとは何であるか。機會均等に外ならないのである。即ち平を得るのである。國民が各自政治上に於いて同等の權利を得んとする、宗敎上に於いては同等の幸福を享けんとする、經濟上に於いても富力蓄積に對して機會を均等ならしめんとする、是れ皆デモクラシーである。しかしながら、機會均等と云つても、絕對の同一は、何れの世に在つても期待することを得ない。政治上に於いても、大臣宰相となり得るの機會は何人に對しても開かれてゐるのではあるが、白痴風顚は到底之れに與るの資格を有しない。宗敎上に於いても、信仰の自由は何人も之れを享有してゐるけれども治安を妨害し、風俗を壞亂するが如きものは之れを排斥しなければならぬ。經濟上に於いても亦然りであつて、富力を悉く平均せしむることは不可能である。然れども、今日何人も努むれば之れを得るだけの機會が開かれてゐるか。是れに對しては然らずと答ふるの外はない。

營利經濟の結果は益々之れを縮少するの恐れがある。一家の經濟に就いて見ても、之れを明にし得る。富んだ人は益々富を增加し得る機會が多い。炭を買ふにも、富んだ人は價の

廉い時に多量に買ふことを得る。故に此のたびの戰爭に際して、石炭が騰貴すると云ふ場合には、富者は豫め買占をしたのである。貧民は現金拂で其の時々々に小量に買ふの外餘力がないのであるからして、みす〱高いと知りつゝも、忍んで買はなければならぬ。是れは一例に過ぎないが要するに、富者が富を造る機會は益々多くなつて、貧者が其の機會を奪はれてゐるのは事實である。即ち今日の營利經濟は均等の機會を與へてゐないのである。日本に於いては、工場法簡易保險法等があつて、近來聊か此の方面に着目するに至つたけれども、是れは社會政策の僅々一小部分に過ぎないものであつて、決して之れのみを以て勞働者の幸福を增進することを得ない。機會均等主義を發揮することを得ないのである。

□經濟的民本主義も節制訓練に俟つ

經濟上から見れば、今後の社會に於いては、貧富間富力の分配に關して攻究をするのが、最大の急務であると信ずる。換言すれば、經濟的デモクラシーの力を如何に伸展させたら可なるかと云ふことに歸着する。しかしながら、前にも屢々述べた如く、是れは國民に節制訓練がなければ實現し得ない。勞働者が今日と同一の地位に在る間は企て得られない。寧ろ治安に妨害があるやも測り難い。而して節制訓練は一に之れを敎育の力に俟たねばならぬと思ふが、更に又穩健なる勞働組合の設置の如きは、戰後に於ける必要なる事業であると信ずる。

勞働組合は、或る意味に於いては資本主に對して危險なるものである。資本主から觀れば、ストライキの如きは事業の進捗を妨害するの感念がある。しかしながら是れは勞働組合の節制訓練の如何によることである。政治上から觀て、英吉利の如きは、デモクラシーは既に成熟して、決して君主政體を轉覆せんとするが如きことはない。是れデモクラシーの病的方面が既に免疫になつてゐるからである。之れと同じく、勞働組合も、節制訓練を以てすれば過がない。しかし今日妄りに之れに對して壓迫を加へると、却つて反撥の力を大にするであらう。獨逸の顚覆も、露西亞の瓦解も之れが爲である。故に之れを善導することが必要である。勞働組合の上に穩健と云ふ文字を加へたのは是の故である。

要するにデモクラシーは天下の大勢である。之れを抑壓することは不可能である。之れを善導することが必要であつて、善導すれば、現今の私有財產を破壞するが如き狂暴なることは敢てしない。最後に一言を費すべきは、デモクラシーの眞意義は機會均等に外ならぬのであつて、政體には關係がないと云ふことである。日本は建國以來上御一人下萬人と云ふことを主義としてゐる。是れ日本の國體である。而して下萬民主義を貫徹せうと云ふのがデモクラシーの眞意である。經濟上に於いても亦其の如くである。中古豪族專權の時代から營利經濟の世に移つて、金力が權を專らにしてゐるが、此の趨勢を打破せんとするのがデモクラシーの思想であつて、經濟上國民に均等の機會を與へられんことを望むに止まるのである。遠き將來は知らず、今後九十年間の時代は此思想を實現するのを以て特徵とするであらうと信ずる。(大正七、一二、一七談)

文明改造の宗教的方面

早稲田大學教授
廓清會理事　内ヶ崎作三郎

一　戰魔暴威を逞うせし此大亂

メーテルリンクの『青い鳥』に於てテルテルとミテルと云ふ少年少女が幸福の表號である青鳥を探して夜の天國に入つた。女王はあらゆる部屋を固く閉して見せようとはしない。然るにテルテルは如何なる錠をも開くことの出來るダイヤモンドの鍵を有つてゐる。夜の女王もテルテルがこれを利用するを止むることが出來なかつた。テルテルの最初に開けたる戸から五六の幽靈が逃げ出した。女王は犬の助けを藉りて辛じて之等を元の部屋に閉ぢ込めた。テルテルの次に開いたる部屋は病魔の潛めるところであつた。小さい風邪の神は隙間より逃げ出てた。女王に呼び止められて再びその室に歸つた。やがてテルテルは次の戸を開かんとしたるに、女王は油斷するな、そこには軍魔がゐる。彼等はいつもよりも恐ろしく力強くある。若しその一疋でも逃げ出したならば、何事が起るかは、天が知り玉ふのみである。常に、この魔神等は重々しく身動きが自由でない。然しお前がその洞窟を覗き込む間彼等は戸を背後より押しつけねばならぬ。テルテルは用心に用心を重ねて戸を少し明けて覗いて見たが、呼び出した。『速く!、速く!、皆さん一生懸命に戸を押して下さい、彼等は私を見つけましたよ。此方に押し寄せて來ましたよ。戸を擲き壞す見幕です。』夜の女王は之を聞いて吃驚した。女王は『さあ皆さん力を合して押して下さいパンやお前は何をしてゐるんだ。もつと押さんかい。偉い力だな。もう弱り初めたもう峠は越した。テルテルお前は見たのかい。』テルテルは『あー見ましたよ。大きな恐ろしい奴等さ。彼等は青い鳥は有つてゐますまい。』

これは譬へてある。詩歌である、劇である。然るに一九一四年七月の下旬にこの戸を押し開いて、軍魔の群が飛び出した。彼等は、四年三ケ月の間その暴威を逞うした。約八百萬人の壯丁は死し、五百萬人は不具者となり、その爲めに三千數百億圓の巨額が費された。これは有形的損害であるが、無形的損害に至つては、之を統計を以つて現はすことが出來ない。貞操を蹂躪せられたる處女、奴隷の如く虐待せられたる俘虜、子を失へる母、夫に別れたる妻、家族に捨てられたる孤兒、これ等の人々の苦き經驗、悲哀と悔恨との分量は如何なる數字を以つてして表はすことが出來ようか。

各大學の精英は空しくその血を以つて戰場の草を染めた。

幾多の創見と發明との源泉たるべかりし頭腦は空しく爆彈の爲めに碎かれた。久しき間塹壕中に半野獸の如き生活を送りたる文明人は、その道德的情操に於て、又宗敎的感情に於て著しく退步したてはあるまいか。勝者も敗者も、各の家鄕に歸れば、田園は荒れ、貯蓄は失はれ、經濟的壓迫の下に來るべき數十年を苦まねばならぬ。見樣に依りては、歐洲の文明は、一世紀の退步をなしたと斷言しても宜しい。

二、沙上に建てられたる文明

然れどもかゝる貴重にして莫大なる犧牲を拂つた以上は、人類は大いなる敎訓を學ばねばならぬ。永久的の結果を刈り取らねばならぬ。この大戰亂の突發するまて、歐洲烈强の人民は、各自の文明に醉うてゐた。彼等は大磐石の上にその家を建てたりと確信してゐた。衣食住は安樂となり、旅行は愉快となり、文化の華は永へに歐洲の天地を飾るならんと期待した。吾人も亦大戰亂突發する三年前まて彼の文明の恩澤に浴し戰爭來の噂を以て風聲鶴唳に過ずと考へてゐた。吾人は彼の文學を味ひ、藝術を愛し、その偉人を仰いだのである。然るに何ぞ圖らん。その建物は岩の上に建てられずして砂の上に建てられたのてある。疾風吼颷、大水氾濫すれば、見るまに土崩瓦解するに至つたのてある。要するに大戰以前の世界は安全なる世界ではなかつた。人類同胞の意識が政治的、外交的に充分に實現されなかつた。個人として親切なる人々は英國にも米國にも佛蘭西にも伊太利にも露國にも、獨逸に於てさへも多かつたのてある。然れども一度び戰の喇叭響き渡れば、風前の枯葉の如く、之等の善人は、何等の力なく、卽ち各自の國民的大勢の赴くまゝに任せざるを得なかつた。國際的意識はよく政治家、外交家、資本家、軍人の間に徹底せざりし故に、この空前の大悲劇が、演ぜらるゝに至つた。

故に戰後の大問題は、國際聯盟より大なるはない。國家がその存在を確立して、外部より侵略征服せらるゝ危險より脫すれば、社會的民本的に發達せざるを得ない。かくて國民各自の間に正義と公平が行はれ、各人に機會が分配せらるゝに及んて、各個人の精神は國民的たると共に、國際的に進まざるを得ない。國家的より一躍して國際的に進むは不可能なことてある。この度の大戰爭の原因は一八一四年の維納會議の決定が不滿足なりしことが原因の一つてある。奈翁の歐洲戰爭は、被征服國民の國民的自覺を挑發した。而してその自覺は維納會議に於て充分なる滿足を與へなかつたのてある。ウイルソン大統領の主張にして、來らんとする講和會議に採用さるゝとすれば所謂民族自決主義に依りてこの缺陷を補はるゝてあらう。故に今日の最大急務は、各國民はその內容を社會化し、民本化して、各人にその天賦の能力を發揮すべき機會を與ふることてある。かくして各人の人生觀、國家觀、世界觀は大きさと深さと、高さとを加ふるに至るてあらう。その當然の結果は、國際的聯盟となつて現はれざるを得ない。

吾人はウイルソン大統領或はロイドヂョーヂ氏の如き有力なる政治家に依つて、國際聯盟が提唱せらるゝことを喜ぶのてある。實は東西古今の聖賢も漠然乍らもこの理想を有したのてある。例へば基督の神の國は、心靈の王國を指したる

ものなれども、同時に地上に於ける理想の社會を聯想したものであつた。然れども中世紀の歐洲に於て羅馬皇帝は世俗の社會を支配し、羅馬法王は心靈の社會を支配する分業は行はれし以來、政治家のなすところと、宗教家のなすところは、互に疎遠するに至つた。故に宗教家は、神の國の福音を說け共、これを政治的に實現せんとするの熱心を缺き、政治家はその政策を宗教的道德的基礎の上に置くことを忘れた。故に實現の生活に於て政治と宗教道德は相離れ、動もすれば、政治は、權謀術數となり、宗教は未來生活に對する一種の憧憬に溺るに至らんとした。されば今日以後に於て兩者は接近せざるを得ない。政治は宗教的、倫理的、哲學的の理想を離るゝ能はず。宗教家は、その理想を以て政治家、軍人、實業家を鞭韃することが必要である。

三、國際聯盟の宗教的基礎

吾人は歐米强國の代表的政治家に依つて、國際聯盟の提唱せらるゝを歡迎するのである。同時に吾人はこの政治的理想に對して、宗教的道德的の基礎を提供せねばならぬ。基督教を非難する人は曰く『基督教は失敗に歸した。一切の宗教は破產した。歐洲は基礎教文明を以つて誇つたのであるがこの大戰亂を豫防することが出來なかつた。これ確かに、既成基督教諸派の缺陷及弱點を暴露したものである。』と。一體基督の眞髓は何んであるか人類の進步發達を妨ぐるが如き獨斷的信仰箇條は決してその眞髓ではない。吾人は羅馬教會の組織、訓練、藝術、儀式を尊敬する。然れどもその自由進步思想に對する壓迫、教會萬能論、法王の絕對主義の如き、果して今日の識者を心服せしむることを得るか。希臘教會は、健全なる小部分を除いては、因習迷信とに囚はれた。英國國教會の如き、その富と力と學とは尊敬するに足れども、依然として十七世紀の思想より脫出するを得ないではないか。其他非國國教の諸派に至つても、ある者は三位一體論に囚はれ、或者は處女降誕說を墨守し、ある者は基督再臨論を高調してゐる。その至誠と熱心とは尊敬するに足れども、國際聯盟の精神として果して充分なりや否や、傳聞するところに依れば英國國教會を中心として各宗派の同盟は、國際聯盟の成立の爲めに大なる努力をなしつゝありと云ふことは吾人の意を强うするところである。米國に於ても、同樣なる運動が行はれつゝある樣である。然れども同時に吾人は基督教自らがその根本に立ち還つて、末葉を捨つるの大英斷を行はねばならぬ故に基督教の根本義を考査するの必要がある。

四、基督教の根本的三大精神

基督教の第一義は、受くるよりも與ふるは幸なりと云ふことである。かく云ふは必ずしも、物質慾を放棄せよと云ふのではない。然し乍ら吾人は取らんが爲めに取るに非ずして、與へんが爲めに取ると云ふ覺悟がなければならぬ。淸泉は汲むこと多ければ湧くことも多いのである。太陽は自ら取らずして常に與へつゝあるではないか。吾人は與へんが爲めに學ぶのである。學んで而して後に與ふるは正當なる順序なれ共その學ぶことの窮りあるを知らないのである。

然れども與へんが爲めに學べば、常に學ばざるを得ない。歐米の實業家には、與へんが爲めに儲くるものが多い。ロックヘラーは市俄古大學の爲めに五千萬圓を投じ、スタンフォードが七千五百萬圓をスタンフォード大學に投じたるが如き、又カーネギーやフォードの平和運動に對する寄與の如きこの態度を語るものではないか。我國の實業家にも奇特の人士輩出したれどもその與ふる金額極めて寡少である。要するに我國の實業家は儲けて然るのちに與へんとする。實際容易に儲くる事能はざるものである。我國民にして國際聯盟に加入するの希望あれば、この寛大なる精神を學ばねばならぬ。

基督教の第二義は、力よりも愛を重んずることである。吾人は力を輕んずるものではない。されどその力は愛に伴はねばならぬ。基督は力の人であつた。彼は謙遜と柔和と信賴との體現であつた。獨逸は愛より離れたる力の實現に熱中したのである。而してその末路はダンテの『神曲』に於ける地獄の魔王の如き運命に陷つたのである。吾人は島國根性より脫せねばならぬ。猜疑と嫉妬と邪推より自由とならねばならぬ凡ての人に對して、好意を有せねばならぬ。好意的人格者とならねばならぬ。吾人は弱者に對して同情を寄せねばならぬ吾人よりも文明に後れたる人種に對して指導せねばならぬ。

基督教の第三義は、個々の心靈が、神の大靈に充さるゝと云ふことである。吾人は神の定義を下さんとするに非ず。然し乍ら宇宙の根本に大生命を認めざるを得ない。この大生命を接觸し、交通する時に於て吾人の心靈は、法悅を以て感激し、勇氣と希望とが與へられ、獨創的精神が岔湧するのである。又かくして人類の同胞意識が強めらるゝのである。

この三大精神は基督教の根本義である。世界の基督教徒はその末義に拘泥せずしてこの根本に立つならば、國際聯盟は容易に成立し得らるゝであらう。國家が社會化し、民本化せずしては國際的に進む能はざるが如く、保守的基督教はその內容を進化せしめ、一層自由なるものとなすに非ざれば、國際的宗教となつて、國際聯盟の精神的基礎を提供することが出來ないであらう。

この度の大戰亂は人心のドン底を洗ひ浚ひに暴露したのである。その暗黑面は悉く開放された。戰後の宗教は、その反動として、又その補償として、人心の最高を示させねばならぬ。過去の宗教が多くの弱點を有したりとすれば、將來の宗教は、多くの長所を發揮せねばならぬ。この理想が實現せらるゝ曉に於て、貴重にして莫大なる犧牲の意義が現はるゝであらう。失ふ所多かりしが如く、得るところも亦多くなるであらう。國際聯盟は戰後の最も重要なる問題である。而してこの成立を促す爲めには、世界各宗教は一層自由進步の色彩を帶びねばならぬ。これ即ち文明改造の第一歩である。

媾和使節として西園寺侯が愈々行くことになつた。侯は果してどういふ理想と成案とを有して行くのであらう、日本國家を代表する彼が、一言も之に言及したことを聞かないに比し、ウイルソンの有樣はどうであらう。英國皇帝をして『閣下の來訪は歷史を作るもの』と讃歎せしめたが、如何にも其の堂々たる意見は世界を動かしつゝあるではないか。第一侯は西園寺侯が風流だとか何だとか云つて、家庭さへ碌にあるかなしの有樣が氣に喰はぬ。今度も妾なんぞの御同行だけは、國家の體面上御免を蒙りたいものだ。（江南）

文明改造の道徳的方面

早稲田大學教授 法學博士
廓清會評議員
浮田和民

一、誤れる國家思想

今回の世界大戰の結果、改造を要するは國家の觀念である。今迄の如き國家思想又は國家主義にては、根本的に世界の平和を成立せしむることは扨て措き、全く國際上の平和を破壞するやうな關係になつてゐる。從來の國家思想では國家を絶對無制限の主權を有して、神聖至上の本質を具するものと見做して來たが、その國家といふは、いづれも自國のことにて、全く外國を眼中に入れて居ない思想である。先づ第一に國家至上主義といふことが間違つて居る。世の中には、國家の外に國家と同樣に絶對の價値を有するものがある。家族の如き又種々なる學校、敎會、宗敎上の團體、また文藝、美術、科學に關する人間の文化的の活動は、人生の價値に無上の意義を與ふるものである。國家はすべて是等の絶對的に價値ある人間の活動を保護する機關として意義をなし、又價値を有するものである。特に人間が國家的の活動を爲すことにより、其公共的精神を發揮し、その道德的向上をなす爲に、其の機會と、これに闕くべからざる要素を供給することによりて、國家の意義と價値とを生ずるものである。人間生活の終極目的よりいへば、國家は方便にして、目的ではないのである。然しながら人間終極の目的を成す方便として、缺くべからざること、家族と同樣の性質を有するもので、或る意味に於て、人生終極の目的の一部分として、之を尊重せねばならぬ。普通の物質的機械や方便と同一視すべきものではない。個人としての人格の無限なる價値と、その人格を保護し、養成し、發展せしむる必要條件として、家族及國家は或意味に於て同等絶對の價値を有するものとしなければならぬ。個人の人格が絶對の價値ある處より、家族及國家も亦絶對の價値ありといふことができる。この三つのものは、三にして一、一にして三、謂ゆる人生の三本尊といふべきものである。

二、誤れる國際關係

それて、國家も或意味に於て、神聖なりといふことは、無意義のことてはないが、從來の如く唯自國のみを神聖となして、或は自國の政體のみを神聖となし、他國若くは他國の政體を無視し或は輕視する根本思想の上に、國家を經營するに於ては、全然國際關係は成立するものてない。論理上の結論としては、自國が神聖てあれば、他國も神聖てあらねばなら

ぬ。自國の政體が尊ければ、他國の政體も尊からねばならぬ。國と國との關係は、やはり人と人との關係であるから、國際上の關係も社會上の關係と同樣、道義法の下に支配されなければならぬ。卽ち國際聯盟といふ如きは、疾の昔に成立して居なければならぬ筈のものであつた。それが從來組織されなかつたのは、種々の原因によりて、止むを得ざる次第であつた。第一、一國內の交通すら、完全自由にてきなかつた時代には、いづれの國家も先づ自國の內を統治することに、全力を傾け、外國の事や、國際關係にまで、思慮を及ぼし、又は努力をなす暇がなかつた。第二、その結果として、列國政體を異にし、宗敎を異にし、人情風俗を異にし、外國の事といへば、殆んど星の世界を見るが如き心地せられたので、外交若くは國際上の關係といふことは、歐洲列國といへども、今日の如く頻繁且つ連續的でなかつた。

然るに第十九世紀の前半紀、鐵、電氣蒸汽船などの發明あり、その後半紀に電話、無線電信などの發明あり、今又飛行機、潜航艇などの發明ありて、地球全體は、昔の日本六十餘州よりも狹くなつたと同じ結果を生じて居る。外國關係は、最早政府と政府との間に、時々使節を交換することにあらず、人民と人民とが個人として、又團體として、日々夜々常住不斷の交際をなすことになつて居る。今回の歐洲大戰によりて考へても解る如く、交戰國民間の關係は、戰時に於ては、殆んど昔時の內亂同樣の結果を生じたのである。國としては、敵味方に分れても、各國の帝王が啻に親族同士の間柄であつたのみならず、人民と人民との關係も、多くの場合に、親族同士、敵味方とならねばならぬ事情の下に立つたのである。而して交戰國の間には、戰時中といへども、絕ゆべからざる貿易關係が存在して居つた。今日の世界に於て、從來の如き無組織なる國際法の下に立つことは、文明世界の殆んど堪へ難き苦病となす所である。今回の平和會議に、米國ウィルソン大統領の盡力によりて、列國會議の第一主要問題として、國際聯盟を討議し、その成立若くはその成立すべきことを假定して、歐洲の改造、戰後の問題を解決せんとするに至つたことは、實際上必要なことであり、又理論上必らず然らざるべからざることとてある。

三、各國內部の改造

此の如く歐洲大戰の結果として、國際上の關係が、戰前と全くその趣を異にせんとする場合であれば、各國家の內部に於ても社會的の改造は、固より當然のことである。從來國と國との關係が、平和の時といへども、殆んど戰時の思想、又は戰爭の目的を以て、國家經營の第一位に置き米國の如き特別の事情の下にあつた國を除く外、いづれも陸軍若くは海軍を本位となし、軍國の政治を主眼となしたので、勢ひ國家內部の組織も、軍隊組織がその中樞となつて居つた。軍隊組織を中樞となす以上、民本主義の政治といふことは、多くの場合に於て、實行される譯にゆかない。今度の戰爭によつて證明された如く、立憲政治にも戰時中は殆んど中止の止むべからざるに至ること止むを得ざる次第である。要するに從來の國際關係は平和を目的とせず、往々戰爭を目的としたもので

ある。社會が軍事行動を專らとなす間は、戰爭に勝利を得る必要條件として、多數は少數の指揮命令に服從し、家族及個人は、國家のために犧牲となり、女子は平時男子に隷屬し、戰時には父子兄弟を、戰場に送りて、戰後悲慘の生活を爲さねばならぬ次第であつた。これは人間始つて以來、幾千年の間、繼續した事實であるけれども人間の理性と、文化の理想とは、これを以て人間生活の永久的規範とすることはできぬ。國際關係の改造と同時に、各國內部の大改造が必然的に起り、家族の組織、夫婦の大倫、男女の關係自ら一變しなければならぬ。從來の如く祖先崇拜、男尊女卑の習慣は、全く改造されなければならぬ。吾々は祖先を崇拜する代りに、子孫を崇拜しなければならぬ。子孫の幸福を祈らなければならぬ。子孫が改善され、子孫が繁昌すれば、祖先の名譽は、自ら永久に傳はり、祖先の靈は、子孫の繁榮によりて、長へに祭らるゝ譯である。子孫が墮落し、子孫が滅亡するやうでは、祖先崇拜は、祖先を侮辱すると同じである。今日以後吾々は祖先の墳墓を飾る代りに、子孫の發展する有ゆる設備を完全しなければならぬ。而して子孫を本位とする以上、國家はその兒童を國寶として、保護し、教育しなければならぬ。又その兒童を產み、この兒童を育くむ國家の母たる婦人、及び女子を尊敬し、保護し、またその自由發展の機會を與へ男子同樣、婦人の天才を各方面に於て發揮せしめねばならぬ。從來國家は强健なる男子を養成するを以て、富國强兵の主要目的となしたる如く、今後の國家は健全且つ聰明なる婦人を養成することに、その大努力を盡さなければならぬ。婦人の身體が强健であれば、男子の身體は自ら强健である。婦人の精神が聰明であり、快活であれば男子の精神は自ら聰明になり、又快活になるものである。理論上からいへば生物としても、人間としても、社會は女子を本位となし、女子教育に重きを措き、女子の品性を健全ならしむることに、全力を盡くすのが男子のためであり、又人間の爲めである。

四、新理想の生む新組織

戰後文明の大改造は、宗教にあらず、哲學にあらず、また美術にもあらず、寧ろ過去に於ける大宗教、大哲學、及大美術の理想を、國際上及び社會上の根本問題に實現することである。宗教や哲學や美術は、文明の結果として自然に將來新なるものを生み出すことになるであらう。今日吾人が文明改造の根本條件として、その世界的に必要なりと思ふものは國家に對する從來の誤れる思想を排斥し、又國家及び家族の中心たる婦人の位地に對する從來の謬想を一變せしむることである。これは今度の戰爭の結果として世界的に新組織又は新理想を現出せしむることになるであらう。凡ての國際問題及び社會問題は、その新組織又は新理想に從つて解決されなければならぬ。吾人は第一に自國を愛する如く、又外國を尊敬しなければならぬ。第二には吾人は男子を尊ぶ如く女子を重んじなければならぬ。之れは理論上動かすべからざる原則であつて、從來國際上の關係及社會上の關係が、此の原理の上に立つて居なかつた爲に、戰爭革命又は凡百る社會の悲劇を生じた譯である。

文明改造の思想的方面

文學博士　桑木嚴翼

■武力的戰爭が唯一の戰爭の形式ではない＝不和思想を空想視する者に對する實驗的證明■

さしもに長い戰爭も遂に落着して、再び平和の天地に歸る事は、何人も喜ばねばならぬ處で、殊に我々の世界に再び立歸つたやうな感じがするのである。全體此の戰爭の原因とか或は責任者とかいふ問題は、今日の判斷が大體一方に傾いてゐるが、長い歷史上の審判では或はどう變更するかも知れない。けれども兎に角戰爭の發頭人は直接には獨逸と露西亞であつて、それが二國とも昔日の狀態に歸るを得ないのであれば、戰爭とか軍國主義とかいふことは、表面上敗北に歸したことは疑ふ可からざる事實である。故に今後の世界は如何なる形式を取るにせよ、當然平和主義の世界でなければならぬといふことは、もう明白なことのやうに思はれる。

然るに一部の論者は、此の平和主義を依然一個の空想視して、之を主張することを時勢に疎い學究、若くは甚しきに至つては女性的論者といふやうな非難を加へてゐる。斯かる論者は全體いつ迄戰爭的社會の繼續を夢見てゐるのであらうか。或は戰爭は人類の本性に全く除く可からざるものであるかも知れないが、併し其の形式は種々に變更する。武力的戰爭が戰爭の唯一の形式でない限り、此の戰爭に反對する理想が一槪に空想視せらるゝ譯はない。飽迄も平和思想を空想視する論者は、其の根柢には依然武力的建國の理想を藏してゐるもので、これも或時代には適當の方法であつたかも知れないが、既に今日其の思想が全然失敗したことを實驗的に證明した以上、又過去の歷史に徵しても純粹に馬上に天下を取るといふことは、不可能であつたといふことを認める上は、最早其の蒙を悟つてもいゝ譯である。

元より今日一方の人々の唱へる平和主義が、徹頭徹尾完全無缺といふ譯ではない。或は平和の假面の下に可なり大きな野心を包んでゐるかも知れないといふ懸念もあるが、併しそれは兎に角表面上隱蔽せられてゐる限り、其野心の乘ずる機會のないやうにさへすれば、結局それを埋沒して了ふかも知れない。所謂僞善家が其の僞善に煽てられて、とう〳〵裏面の惡心を發揮する機會がなくなるやうに、假面でも平和主義が主張されてゐる場合には、極力其思想を助長せしむることが、自ら其の思想の眞に行はれる端緒となると思ふ。今日の機會に於て平和主義を單に皮肉に嘲弄批難することは、結局此の思想に同情を持たないことを示すものであらうと思ふ。

■今後の思想界は平和主義を基本として‖
‖人生の幸福と發達を内容とする文化主義■

私は今後の思想界に於て、先づ第一に平和主義を基本とするものが益々榮える事を希望してゐる。此の思想の第一の發現若くば其の思想全體の發現と見てもいゝのは、「文化主義」といふ言葉で言ひ現はせると思ふ。平和と云ひ人道と云ひ或は正義といふ其の他の言葉は、何れも美しい内容を有つてゐるが、併し稍々一面に偏した感じを與へないでもない。平和と云へば直に無爲にして化するやうの社會を想像したり、正義人道も屢々假面となつて人の疑を招いたり、或は勿論道德的の方面に限られる樣な感じがする。私は勿論道德を廣義に解釋する場合に、これを重んずることに躊躇しないが、世間普通の言葉で道德倫理といふことのみを力說する人の思想には、何となく窮窟な感じを有つてゐる。勿論道德に背反するといふ意味ではないが、人生の幸福とか發達とかの内容には、人間本來の性質の各方面に於ける發達を豫想して居るから、藝術も學問も乃至殖產興業の如きも、何れも相當の價値のあるものであることを認めざるを得ないから、狹い道德のみに限るのは、之等の意味を抑壓するやうな誤解を招き易い。事實、上道德宗敎等に偏した思想を持つ人は、學術藝術に甚だ狹隘な解釋をくだしてゐる。斯うした弊を避けるには、私は人生の目的として文化の增進を擧げることを適當と思つてゐる。

■文化が束縛なしに自由に發展する時代‖
‖外來思想と固有思想との區別をするの蒙■

此の文化の發達は、如何なる國家社會に於ても全然無視せられてゐた譯ではないが、併し所謂軍國主義の社會に於ては一切が軍國の目的に使用されて來るので、文化の發達に種々の制限や抑壓やが多くなつてゐた。今その思想の根柢から覆されたと共に、卽ち平和的思想の一般に皷吹せらるゝと共に此の文化が何等の束縛なしに自由に發展することが出來る時代となつた。故に平和の世界は語を換へて云へば文化主義の勢力を得る時であると云つてよいと思ふ。

既に斯の如く文化が本位となつた社會に於ては、最早偏狹な彼我の差別の如き事は沒却せなければならない。今日世界の思想が自由に交通し得る世の中に、昔日の鎖國的狀態を望むことは、妄想に過ぎない。世間で或は外來思想がどうの斯うのといふ意見もあつたが、今日の時勢には最早其のやうな議論はなさゝうに思はれる。併し依然として一方には外來と固有との區別などを說いてゐる者もないではない。抑も各國の文化が流通するといふ事は、各國の特色が全く消滅するといふ意味ではない。人各々個人性ある如く國家にも多少斯くの如き性質が認められぬでもない。けれどもそれは互に差別する處で却つて相補ふことが出來るものであるから、斯かる特色を保存することは決して不合理ではない。併しながら其の特色は自ら生ずるものであつて强て、作り出すものではないのである。

從つて若し自然に消滅するものであれば、それはあまり値打のないものであるかも知れない。如何にしても消滅しない處に特質の特質たる處があるのである。

■特質必ずしも固有に非ず、獨逸失敗の＝因は誤つて文化の固有性を認めたるにあり■

此の特質は世界如何なる國民の內にも自ら認めらるゝ處であるから、之を我國に於て獨り非常に力を盡して保存させる必要はない。左樣な努力をしないでも、我々の特質は決して亡びるものではない。乍併此の特質は必ずしも固有といふものではない。全體固有といふのは何物であるか分らぬ。今日我々の文化に特有なるものは、過去の歷史中に自ら發生し淘汰されて來た結果であつて、千年以前二千年以前と限つて、其の特質の內容を決定することは出來ない。千年以前のものが果して悉く固有であるか、千年以後のものが我等に取つて固有の如き感じを與へないであらうか。是等は實例に就て考へて見れば明白であると思ふ。

それに我々は强ひて固有の文化とかいふやうなことを云はないでも、廣く世界の文化に接觸するうちに、自ら日本的の世界文化、英吉利的の世界文化といふやうなものが出て行くといふことを信じてよい譯である。文化の本來の性質は人生に根據を有するものであるから、敢て此の言葉を忌避する譯もないが、一時文化卽ち Kultur といふ言葉は獨逸の惡德を代表するものゝやうに思はれて、其の言葉まで排斥されてゐた。私は獨逸のクルツールなるものが、必ずしも英米等に於て理解されてゐる樣なものとは考へてゐないが、併し獨逸人の內には餘りに多く自國のクルツールを固有的特有的のものと考へて、之が爲めに却つて他國の反感を買ひ、其の價値ある文化までも排斥せしめるやうなことを遺憾としてゐる。それに獨逸の失敗の原因の一つは、誤つて文化の固有性を主張した點にある。文化其物の劣等な爲めではない。其の文化を餘りに獨占、若くは獨得化しやうと標榜したことであると思ふ。

■今後の思想界に於ける廓淸の事業は＝文化主義に反對する偏見の打破にあり■

私は今後の世界に於て、獨逸の文化を絕滅するといふやうな計畫は到底實行されないことゝて、また頗る誤まつた事で、且つ平和主義の理想にも遠いことであると思ふが、併し獨逸の文化が斯くの如く實價以下に誤解されるやうになつた理由を考へたならば、所謂文化固有の意味を餘程考へ直さなければならないだらうと信ずる。

斯くいふ意味は決して特有若くば固有の文化を蔑視し、若くば破壞しやうといふ意味ではない、我々は如何に努めても自國の文化を離れることは出來ない。其の文化の內に生息しつゝ、而も世界の大勢に順應するところに、特有の文化が益々發達するのであるから、從來の歷史的發達を研究して、更に將來に於ける發達を助ける處に我々の新しい任務が生じて來るから、今後の思想界に於て、依然偏狹なる差別觀をのみ固守することは、最も方向を誤つたる考へ方と認めざるを得ない。

然らば一言すれば思想界に於ける廓淸の事業は、結局此の文化主義に反對するあらゆる偏見を芟除するにあると云はねばならぬ。

文明改造の教育的方面

法學博士　山脇玄

□教授上に於ける謬見の打破

歐洲大戰の實驗、殊に女子の目覺しき働きに鑑みて見ると我國が政治經濟實業教育等各方面に於て施設改善すべき諸般の事業擧げて數ふ可からざる狀勢である。とは云へ今茲に一々論述したらんには數紙のよく盡す處にあらざるを以て、教育の方面、殊に女子教育に就て些か開陳することにした。

我國の女子教育は、近來益々振興普及したるには相違ないが、其の標榜する所はいつも乍ら所謂賢母良妻である。其名は如何にも立派であるが、其實女子を人間として男子同樣其本性本能を自由に發展せしめて居らぬ。唯嫁入先の家によく當て篏まる樣に主力を注いでゐるに過ぎぬ。されば世人が女學校出の女子は家庭の實務に疎く、家事萬端を取扱ふだけの能力皆無なりと叫ぶ所以亦一理なきに非ず、仔細に其の由つて來る原因を攻究して見ると、凡そ左の如き間違つた教授法と試驗勉強に基因するものゝ樣である。

社會に智識の乏しい時代に於ては何でも外國のものを輸入し、新しい品物を我社會に提供するのが、社會進歩の必要條件であつた。事の可否を問はず唯新しい事を知つてそれを紹介さへすればそれで一角の手柄であつた。今日とても其必要がなくなつた譯ではないが、社會に智識を普及し、萬般の施設を整頓し始め、それに國民的自覺が盛んになつて來ると、最早新しいことを知つたり模したり輸入したりするだけでは滿足出來ぬ。一つの事を始めるにしても、又日常の事務を捌くのでも、よく自ら考へ自ら判斷し、最も適當の方法をとつて行くことを最も肝要とする。それには單に智識がある物を知つてゐるだけでは不充分である。物を知つてゐる人さへ少い時代にあつては、それ等の人は勿論尊重されるが、今は時代がそれ以上を要求する。物を知らぬ人も困るが知つたばかりで何等の智慧（Intelligence）もない判斷力も工夫力もない人は實際の役に立たぬ。

□智識を與へて智慧を與へず

現時の教授法は物數を教へるのが主となり、而も各學科に配當された時間は左程多くはない。多くない時間で物數を澤山教へねばならぬとすると、勢ひ驅足的になり注入的になつて、何程分るか分らぬかを考へる餘地はなくなる。今の教授法では勢ひ一杯によく行つても單に智識は與へるが智慧は與へない。智識は何程あつてもそれが單に斷片的に止まつてゐる間は、實際上に餘り有效なものではない。それが融解され、自己の眞の一部分となり、自己の裁斷力を構成するに至つて始めて人生に反射して價値を有つて來る。之れが即ち智慧である。智慧を授けずして徒らに智識を與へるのみの教授法は

結局智識其物をも與へずに濟んで了ふ。斯かる智識は假令ば摩り減つた黑板に書かれた字と一般て、何だか澤山書かれてはゐるが、どの字も判然とは見えぬ。何だか澤山聞かされた聞いた樣な覺えはあるが、どれも明瞭には殘つてゐはしない。意味が充分ならぬ名詞は澤山に頭の中に殘つてはゐるが、眞の內容は極めて乏しい。生徒は人前を衒ふやうな風には出來てゐるが、身を修め心を磨き眞面目に世の中の用をなすものとしては何の準備も出來てゐない。斯かる敎授法を行ふ結果はどうであるか、之は社會は既に一部分は氣付いてゐるが、國家社會の大事件として少し詳く攻究せなければならぬ。

斯くして與へられた智識は、文字だけは備つてゐるが何等內容がない。暗記の形に於て聯想作用を喚起することは出來るかも知れぬが、其內容に於ては何等必然の關係なく、云はゞ根がなくて水面に浮ぶ水草と一般てある。斯かる智識は點を採り試驗を通過するだけには有效てあるが、其れ以上には何の役にも立たない。實に斯く內容のない智識を多く持つてゐるのは、精神遲鈍者に往々見る症狀てある。

既に內容がないから之を働かせようとの企てが起らない、胃の中に余くの不消化物が澤山溜つてゐると同樣、何等の養とはならぬ。事に當つてそれを活動させそれを利用して實際の用に供することは出來ない。活動をするにはそれが充分に統一されねばならぬ。即ち自分のものとなつて、自分の頭の中に適當な場所に收まつてゐなくてはならぬ。更に云ひ換へれば自分が其主人とならねばならぬ。入つた儘不消化に殘つてゐては決してさる都合には行かぬ。之が現代の敎育が役に立つ人物を作らぬと非難される主な原因てある。

□注入主義の及ぼす弊害

不消化で自分に充分分らぬものが澤山頭の中へ這入ると、遂にはどれが分つてどれが分らぬのか差別がつかない。即ち分るといふのはどういふ事かとの明瞭な考がつかぬ。從つて物事を分らせたいとの熱心はなくなる。物を聞いても充分に分らず、分らなくても別に分らしたくもない。斯うなれば智識と自分とは實に何等の交渉もなくなる。智識は其珍らしさを失ひ、何か這入つて來ても刺激してもどうでもよくなる。此の無關の狀態は精神遲鈍に近い有樣である。事を聞いても充分にそれを分らせやうともせず、分らずとも別に不都合に感じない樣になると、凡て物事を根本的に考へる習慣がなくなり、ほんとうなどいふ事はどうでもよい、唯表面を塗抹してどうでもして行きさへすればそれてよい。惡く云へば出任せゴマ化して以て自ら足れりとする。斯うなると實着とか誠實とかいふ引締つた風は全くなくなる、たゞ輕薄な上調子一方となる。學問の研究にもこつ／＼事實を調べ、それを基礎として原則に到達するよりも、寧ろ大膽なる論斷に直に進むを好み、氣焔家獨り喝采されて研究家は却つて輕薄されることゝなる。實際生活上に於ても細かな面倒なことに沒頭して人知らぬ苦心するよりも、寧ろ人聞きのよい大風呂敷でも擴げ、放言高論一攫千金の方法を講ずるをよしとする。綿密着實の美德が之に依つて養はれ得ぬのみならず、苦節とか貞操とかの念も亦尊敬されなくなる。獨逸の工業が盛んだと云つても、其基礎は獨逸人特有の根本的研究の精神の上にあるのてある。一つ物事をするにも先づ其着手の方法を研究し、其方法によつて一つづゝ研究に手をつけて進む、此の精神が社

會に行き渡らなければ安全な進歩は到底出來難い。

終りに健康の方から見て、精神衰弱といふ症狀は多くは此注入的教授法から來る。人が加動的興味を以て勉強してゐる時は大抵は神經衰弱に陷るものでない。神經衰弱の多くは頭の中の無理から起る。分らぬことが澤山ある。それが分つた積りて益々分らぬことを注入される。分らないでも試驗にはそれを暗記せねばならぬ。暗記せねばならぬ〳〵と思ふ心と實際の暗記に用ふる心の力と頭の中で混合して互に騷ぎ出す、それが神經衰弱を起すのである。其の原因の少くも主な一部分は教授法の罪に歸すべきである。

斯の如く智識の分量を主として、生徒の理解力を主んぜぬ教授法の結果は、人を輕薄にし、不眞面目にし、淺薄にし、事に對する熱を無くし、自分で調べ判斷する能力を少くし、頭の中の考を是非共外部に發動したいとの念を亡くする。仕事の内に興味を見出さず、義務の中に沒頭すべきものだとの信念もなくなる。

□智識を筋肉に刻み込む可し

教授の目的が實社會に於て境遇に適應し、相當に發動的の事業をなして、社會生活の内容を豐富にし得る人を作るにある。社會生活の内容を豐富にし得る人を作るにあるは論を要せぬ。實社會で要するものは嚴密にいふと智識其物ではない、世人はまゝ社會生活に要する智識といふが、社會生活に要する智識は數限りもない、それを一々與へる事は學校では到底出來ない。特に社會は始終變り行く、學校で何程澤山の智識を與へても、それで以て其變り行く境遇に應じ行き得る筈はない。況んや實生活に要るものは實は智識でなくて考へる力である、判斷力である。智識を與へてもそれが直に判斷力とはならぬ。智識を與へる方法によりては判斷力をも養ふことは出來るが、智識を與へることは判斷力を與へることゝ同一ではない。特に智識を與へる方法に間違がある爲めに、及ぼして生徒の意志の力實行の力までも減少するやうなことがあつては、教授法は直接に人物養成の防害となる。學校は少量の而も不充分な智識を與へるよりも、寧ろ智識を得る力、境遇に適應する力、更に委しく云へば判斷に要する力を與へるのを目的とせねばならぬ。

實社會に働いて行くのに智識の方面には二つの物を要する。第一智識を得たいとの念と、第二智識を得る方法の智識とで、此二つがついてゐさへすれば、左程澤山のことを知つて居らずとも充分に其智識を擴大にして境遇に適應することが出來る。智識を與へるか、此力をつけるか。物數を教へるか、智識を得るに必要な力を與へるか。之は理論の上は分り切つた事であり乍ら、實際の上にはそれ程注意されない問題であり、之を明に解決せなければ學校の目的は到底達することは出來ない。智識を得る方法は唯斯く〳〵すべしと講義されても得られるものではない。方法を實際に會得するには自分で實地に其方法を試みねばならぬ。文學書を讀むには字引を引くべしと示されても、それで實際の方法が分るものではない。自分が自分の手で字引を引いて見て、字引の引方文學書の讀み方が分る。歷史にしても博物にしても、それを調べる方法を理解するのは皆同樣である。これは斯く〳〵の手續で調ぶればよいと何程教はつても、それで其手續が分り必要に應じて實行出來るものではない。先づ自ら其手續を幾分か試み、時に間違つた方法をも取り、正しからぬ結果に陷つたり困つたり工夫したりする其間に、方法が自然に得られる。方法を考へるのは頭でもしやうが、それが眞に得られるには筋肉に於てするのである。方法の智識が筋肉に刻み込まれて始めていつでも必要に應じて働かすことが出來る。即ち其の力となる。教授は正に之を目的とすべきものであるから、

生徒に自分の筋肉で智識獲得の方法を試みさせ、其方法を筋肉に刻み込むことによつて智識獲得の力を得さす、之を發動主義の教授と云つてよい。此主義を採らねば中等學校は其本來の任務を果すことは出來ぬであらう。

□圖畫科地理科に見る實際的誤謬

今例で示すならば、圖畫科の目的は、生徒の觀察力を精密にし、其見た處のものを繪で以て現はす力を作るにあることは誰も疑ふものはあるまい。然るに若し圖畫科で以て單になるべく多くの物を寫させ某々の物だけは學校で寫したから描けるが、其他のものは畫くことが出來ぬといふやうな生徒を作るならば、其圖畫科は果して目的を達したものと云はれるであらうか、圖畫科に於いて斯ういふ事實があると人が怪しむが、併し同樣のことはどの學科にも共通にあるのである。其の最も見易い例として地理科を引いて見やう。

地理科など現今最も本質の理解されて居らぬ學科であらう、地理科の目的とは自然と人文との關係を理解せしめるにある。此の目的を眞に達せんには現今やつてゐるやうに、世界各國の地誌を洩れなく暗記せしめる必要は少しもない。此頃の子供の用つてゐる日本地誌を見ると、東北地方の地方廳もないやうな小さい町の人口まで載つてゐる。九州の某々縣の產物の目錄が列擧してある。それは勿論無用ではあるまいが、それを一々暗記させ試驗にまで必ず一二題位まで最も目立たないことを出して見るなど、そも何の必要があるのか。子供は暗記するために暗記する。先生の問に應ずる外には何の目的も用もない、一般の人は特種の關係ある者の外は無論そんなことを記憶してゐる者はあるまい。そんな不用なことに汲々骨を折らせて置いて、それで肝心の地理科の目的が少しでも達せられるか、自然人文の關係と云へば、先づ大體に於て某々地勢某々氣候の所に某々の文化が發生するとの智識である。其智識さへ今のやうな教授法では明に得さすことは出來ぬが、其の智識だけでは尙充分と云はれまい。單に某々自然で某々人文が出來たとの公式を得て居つても、其公式に當て篏らぬもの、若くは當て篏まるかどうか分らぬものに出會す時には、直に處置に困る。それでは適當の教育を受けた者とは云はれまい。地理學的考察法を實際に身に得、如何なる人文に對しても直にそれを自然と關係さして見なければ氣が濟まず、自然に接しては直にそれから起る人文を想像して見なければ腑に落ちず、そして兩者の關係を調べ出すだけの力があるならば、それで始めて地理科の教授を受けたものと云はれやう。斷片的に連結せられた地誌＝極端に云へば名所圖繪の變形＝のやうなものを授けても、それが人生に與ふる效果はさして大したものではあるまい。

勿論斯かる教授法をさせ樣とするには今より分量に於てずつと少くせねばならぬ。效用少い形式的の智識の分量が十頁や二十頁減つても、何も憂ふるには足りない。質を損して量を增すのは教授法として絕對に無益である。是等二科に就て云つたことは、殆んど一般學科に就ても同樣に云はれる。效用の少い、物數を教へるよりも、教へ方調べ方を識らせ、それによつて一生自己の境遇に對して調べ考へて、適當な處置

をつける力を得させる、之を中等教育の目的とせねばならぬ。

□試驗は何の必要ありや

試驗は因襲的に學校のつき物となり、誰も之を怪しまぬが單獨に考へて見ると、何て試驗の必要があるか餘程理解し惡い。凡て試驗は平生から全く見ず知らず、何程の力があるか少しも分らぬものに就てするものであつて、概ね檢定の性質を帶びて居る。故に教員檢定試驗や醫術開業試驗とかに就ては其必要はあらう。其實際上の利害得失は別として其存在の理由は認められる、毎日々々自分で教へてゐる其生徒に對しては、理由も必要も餘りありさうに思はれない。

惟ふに現今一般教師が必要とする理由は次の二つであらう

一、生徒の力を調べること

二、生徒に勉强をさすこと

此の第二に就て先づ少し考へて見やう。現今各學校とも生徒が試驗の爲め勉强するのは事實であらう。生徒は試驗によい點を取る爲めに勉强してゐる。それに因つて若し試驗がなくば覺えなかつたことをも相當に覺えるに違ひない。併し斯かる教授法か果して當を得てゐるであらうか。ほんとうに物を覺えるには其者が眞に理解出來、既に得た觀念と固い深い八重の聯絡を得ねばならぬ。それには不斷から度々反覆頭の中に入り、自然に他の觀念と融合せねばならぬ。試驗に臨んで俄仕立に詰込んだつて、それが眞に頭の中へ都合よく收まる筈はない。之は試驗勉强した人の誰も身に覺えのある事實である。試驗勉强が智識其物から見て益のないのは明である。

一體生徒の學力を調べないで、如何にして日々の授業が出來るか、授業は過去の智識を基礎として新しい事實を加へるの意味である。過去の智識が何程あるか、何程正確であるかを調べないではどうして授業が進行させられるか、生徒の力を十分に調べなければ試驗は論ぜず授業其物が出來ない譯である。生徒の學力は試驗を俟たず毎日毎時間調ぶべきもので、それが實に授業の可能の基礎である。然るに試驗で以て學力を檢定すべしとの論の出るのは、實に教育上に根本缺陷があるのを示すものである。之は實例を示せば最も明瞭である。

陸軍では上官が命令を出すと、之を受けた者は必ず其命令がどこにどうなつたかを發令官へ報告せなければならぬ。之が陸軍的性格ともいふべきものであらう。若し命令を出したまゝで、それがどこにどうなつてゐるか、明かならぬやうでは、命令としては不完全である。教授も其通りで、若し教授した事柄が生徒の頭の中の何處にどうなつてゐるかを確めぬ樣では決して完全に安心が出來ると云はれない。一つの事柄を教授する、それを何れだけの生徒がどういふ具合になつてゐるかを調べ、進んで差支ないことが明になつて始めて次へ進む、之が當然の教授法である。それが出來ず生徒の力を充分に調べないで次の事柄に移る。其の必然の結果として試驗をもせねばならぬ。試驗必要論は之から起る。

更に一歩進んで學力を調べることが左程必要であるか、又どれだけ實際に可能なるかを考へて見るに、教師が知るべき事は生徒が果して教授事項を理解してゐるかどうかである。若し生徒が理解して居ないならば更に理解せしむる方法を取

らねばならぬ。若し又生徒の大多數が理解して居るのに理解せぬ者があり、又理解すべき事がどうしても分らぬ者があるならば、其生徒は一期復習させる。所詮教師は生徒に教授を進めんとするに足るだけの力があるかないかが分ればよい。誰が六十三點である五十七點であると明にする必要はない。

□今は女子教育覺醒の秋

大體に於て今日の女子教育は形式の末に流れ、家庭の領分に立入つて其實擧らず、智識に多少益する所あらんも、國民道德の涵養に資する處は少い、今に於て其方法を改善し、人格養成に重きを置くに非ざれば、或は不慮の結果を惹起す事にならぬとも限らぬ。若し夫れ學科目の配列に至つては餘り多種多樣に涉り、而も修業期間は五ケ年に限られてゐるのである。故に大改革を見る迄は現今の範圍內に於て主力を注ぐべきものと、然らざるものとを區別してかゝらねば、其結果は徒らに費して、國家の不經濟之より甚しきはない。生徒の血と肉とを徒らに費して、國家の不經濟之より甚しきはない。世は愈々輕佻浮薄に至るやも知れぬから、吾人は差當り現行の科目中に於て、修身、國語、歷史、理科、數學、體操に主きを置き、之に主力を注ぎ、其他の科目は修業の後社會生活を進める上の端緒となり指針となるの研究に止むることにしたいのである。卽ち歷史地理の如きは生徒は居住地附近は格別の科目として詳細に亘るも敢て不可なかるべしと雖も、それ以外は相互關聯して敎へる方生徒も興味を感ずるであらう。殊に東洋西洋の歷史に至つては併合するを最も適當と信ずるのである。

物理化學は兎角理窟一偏に傾き、日常生活の用を便ずる能はざるは著明の事實である。故に一々家庭の事實殊に臺所の賄に應用してよく呑込ませる樣にせねば何の役にも立たぬ空論に終る。家事經濟簿記などになると愈々以て然りである。

眼を轉じて大局を達觀すれば、世界は男子ばかりの世界ではなくなり、女子と男子と相俟つて協力して事に當る處に進歩があり、富力の增進が伴ひ、國力の充實は圖つて行く事が出來るのである。我國にも第一の工業たる纖維工業の如きは婦人が八割である。紡績の如きも英國は四割であるのに我國ては九割といふてはないか。此の一事を以てしても女子の力の偉大なるを證するのである。女子の覺醒を待つ事今日より急なるはない。戰後に於ける歐洲の大勢力がやがて我國に壓迫し來るは火を見るより明かである。勿論之は餘り望む處でないが、自然の勢として或は何處かと戰をせねばならぬことに陷らぬとも限らぬ。東洋の運命を圖るべく或は隣邦支那と協力して某國に當らなければならぬ時が來ないとも限らぬ。斯ういふ樣な國を擧げて國難に殉すべき時に、男子の留守は當然女子で、或は汽車の運轉手車掌、郵便配達までしなくてはならぬかも知れぬ。さういふ非常に處するには、平生より之に處する覺悟と用意とが大切である。而して萬事の基礎となるべきは實に敎育である。是れ聲を大にして婦人の覺醒を呼號する必要ある所以で、今日は個々に分離してなすべき時期ではない、國利民福の爲めに協力すべき時である。女子も男子も相並んで凡ての事に立さはり援護せねばならぬ。封建時代から續いた長夜の夢から醒むべき時は確に今である。

文明改造と生活問題

早稲大學教授
廓清會副會長 安部磯雄

□生活難は無駄多き生活から□
□須く社會を軍隊組織とせよ□

今回の大戰爭の結果として交戰國民の非常に經驗した事は、生活問題に對する處の思想及び、實行的方面が驚く可き變化をなしたといふ事てある。戰爭前も生活問題の一大變化を來さなければならぬといふ事は種々の人によつて唱へられた。殊に社會主義者の間には之が唯一の題目てあつたといつて差支ない。處が私共戰爭中に考へて見ると、確に社會主義者のいふ處が或程度迄實現された。實現されたのみならず、戰爭の終つた今日に於てはどうしても生活問題は社會主義の說く處によつて改造しなくてはならぬ樣になつて來るやうに思はれる。

それはどういふ事かといふと、簡單に云へば凡ての人間の生活の方法といふものは、規律的にやつて行かないと非常に無駄が多い、また食物の如きは、隨分我々が努力してこしらへたものてある。其拵へた食物といふものに關聯して非常なる無駄がある。それは單に無駄に費すといふ事てはない、假へば其食物を生産者から消費者に持つて來るのに非常の無駄がある。之は一例に過ぎぬが萬事此調子て、私共の生活困難もやはり此無駄なるものが大なる原因をなしてゐるやうてある、其點に於て私共は軍隊組織に非常に感服してゐる者てある。私は戰爭は嫌ひてあるが軍隊組織位無駄のない事をやつてゐるものはないと思ふ。第一無駄な人間が一人も居ない、誰も彼も働いてゐる。要所々々に適當な人を置いて皆が働いてゐる。自分ては働かうと思ふのに仕事がないといふ樣なそんな事は軍隊にはない。

ところが軍隊を離れて今日の社會を見ると、もう戰後に於て大した失業者が出來るだらうと日本に於ても云はれて居る。社會が軍隊組織になれば失業などはある筈がない。一體失業などといふことは甚だ變なことて、深く省慮すべき問題てあると思ふ。人間と云ふものは働きさへすれば何ても作り出す事の出來るものてあるのに、多い時には幾萬幾十萬といふ失業者の出るといふ事は、誠に詰らぬ話てあると謂はなければならぬ。

□衣食住を國家の管理に移せ□
□臺所を廢して共同食堂にす□

第二は衣食住といふものを私共が消費する時に、或場合には國家が管理をする。國家の力てこれ以上消費しては不可い

といふやうに、國家の權利を振ふ事になれば、多少の不自由はあつても人間は困る事はない。一人でも困る者があるとすると國家が營理して居るならば互に有無相通じ餘りある者をして與へしめる事が出來る。これが軍隊組織の經濟的である事を證明するものである。軍隊組織になれば一人と雖も決して餓死する者などは出來はしない。

今度の戰爭は國民としては困つたかも知れぬが個人として戰爭の爲めに餓死したといふ者のないのは、餘程考ふべきである。最も打擊を受けた獨逸を例にとつても獨逸國內に餓死した者はない。之は大敎訓ではないか、戰時中は働き盛りの人は殆んど皆戰爭に出て勞働の力が非常に減じたに不拘、而も一國で生產したものが兎に角にも間に合つたといふ事は、實に驚く可き事實だと思ふ、これは申す迄もなく戰爭中は殆んど國家が食物は管理したから、生產者から消費者に持つて行くのに、少しも無駄がない、交通機關を適當に用ひて、卸商や小賣商が大儲をするといふ樣な事がなくして濟んだからである。

そして一方には貧乏人も金持も食物は同樣に之を取つた。決して金持だから贅澤な物を食べるといふ事はない、食物の制限をすれば皆國中の人か制限をする。コーヒーにしても角砂糖を一つ以上は使はないといふ樣なことを一般に守つたから、それで食物に不足を感ぜずに濟んだのである。

之れが戰爭中の經驗であるから、今度戰爭が終つたなら其點をやはり凡ての國民が考へて行くに相違はない。つまり戰爭中の經驗を今後の社會に適用して行きさへすれば、必ず好結果を得る事が出來るのである。それは個人の小さい意味の生活にして見た時にが、例を取つて見れば我々が一軒々々で飯を焚いてゐるなどは經濟的に考へて見れば隨分くだらない話で、不經濟は定まつてゐるから、若し我々が生活問題を解決する爲めに一歩々々進んで行くなら、戰時英吉利の各地に於てやつてゐる樣に、一部落々々で共同の食堂が出來てゐるが、之は私は戰爭が濟んでも無くなるまいと思ふ。戰爭の爲め必要上やつて見た處が成績がよい、いふ迄もなく經濟であるから恐らく此組織は永續するであらうが、斯く萬事共同して行けるといふ事になると非常に經濟になる、亞米利加に於ても昔から隨分それに似たものが表はれてゐる。一家族が間借りをして、安仕度をする所に行つて仕度をする、さうすると一軒々々に臺所の樣なものを持つてゐるよりも餘程經濟である。さういふ處に行つても一人々々食べるのではない家族が一緒に食卓に着くのである、これは日本では出來ない、日本では宿屋に行つても一人々々で食べるなどは可笑しい習慣である。西洋人などは宿屋も食堂で一緒に食べる、やはり生活問題の解決の上から段々日本にもさういふ風になる事と思ふ。其一つの試みとしては現に東京では須田町に簡易食堂が出來た、元の新橋倶樂部には平民食堂が出來た。現在は獨身者が多數でも今に家族を持つてゐるものが行くやうになるであらう、これは世界の大勢で、家內で一緒に食べなければ家族團欒の樂しみがないなんといふ事は決してない。洗濯の樣なものでも皆將來共同でやる樣になつて來ると思ふ。

それからも一つ今次の戰爭によつて考へるのは、將來段々

戰爭は少くなるであらうが、若しか將來天災の爲め干魃とか其他天候の激變の爲め不作であるといふ樣な場合に、今日の經驗から云へば、國家が食物の管理をする、政府が分配をするといふ樣なことになつて來れば、一部の人が飢死をするといふ樣な事はない。丁度亞米利加や歐羅巴でやるやうに向ふ三ヶ月とか半年の間とか一人前に就て之以上の食物をたべてはいかぬといふ樣な應急策を講ずるから、其天災のある間は金持だから多く食べ、貧乏人だから飢死するといふ樣な事はない、誰も彼も平等に食べるといふ樣なことは、今度の戰爭に於て經驗し得た處である。

□刮目すべき獨逸政變の將來□
□産業上にも民本主義來らん□

要するに今度の戰爭に於て我々は生活問題といふものに非常な變動が來るといふ事を考へるのである、而してその考を一層强くするものがある。それは獨逸の政變であつて、獨逸は全部殆んど社會黨の人を以て政府を組織してゐる。之が今どういふ風に續くか知れないけれども、海外電報によると今社會黨は溫和な方が政權を持ち、之に反對してゐるのはリーブクネヒトを首領としてゐる過激派である。これだけを見ると何だか露西亞の過激派が獨逸にも現はれてゐる樣であるが、リーブクネヒトの一派が躍起運動をしてゐるのは、もう此處迄來たんだから純然たる社會主義の理想を實行しなくてはならぬといふのであらうと考へる――勿論今日では想像に過ぎないが――溫和派の方は政權を握つたがやはり實際政治を行ふには資本家階級と提携して行かねばならぬといふ、妥協的態度に出てゐると思はれる。若し然りとすれば政治は民主的になつたにしても、産業界に社會主義の理想を實行する事は六ヶ敷い、今の政府が續けば社會主義の理想は實行されるかどうか覺束ないが、若しリーブクネヒトが政權を握り、多數の國民が之を認める樣になれば、生活問題に就て餘程面白くなると思ふ。然らば彼等がどういふ理想を有つてゐるかといふと、鐵道を國有するやうに一切の事業を政府がやつて行く事になる。そして人民に向つて第一に保證する事は、必ず仕事を與へるといふ事、失業者は一人もない、所謂軍隊組織になるのであるから、先づ仕事の保證をする。第二には生活費の保證をする。働きさへすれば必ず食へる、妻子二三人位えを有してもその最低の生活を保障する。此の二つが社會主義の要點である。

さうすると先づ此事が獨逸に於て試驗されるのではなからうか、其意味に於て獨逸は世界中の社會主義の實驗室になる譯である。今迄はとても大仕事でこんな實驗は出來なかつたが、今日は出來さうである、若し之が成就するとすれば歐米の各國も眞似をせねば經濟上損になつて獨逸に負けて了ふであらう。

動もすると社會主義を目して危險思想となすが、我等の抱懷する社會主義の理想と國體とは決して牴觸するものではない。また元より社會の秩序を壞亂するものでもない。一言にして云へば政治上のデモクラシーを産業上に認めんとするに外ならぬ。

文明改造と日本の男女問題

一條忠衛

一 世界の平和に關する男女問題

日本の男女問題は將來何う云ふものになつて、何う云ふ具合に解決さるべきものであるかと云ふことに就いては、自分は一昨年拙著男女道德論を以て一應の解答を試みた積りであるが、此の一小論文では專ら今回の世界戰爭に由つて日本の男女社會が何んな影響を受けて、其處に何んな臨時の男女問題を偶發して、それが如何樣に解決さるべきかに就いて、極めて特殊的な觀察をして見ようと思ふのである。

御承知の通り、今次の世界戰爭は前代未聞の大戰役であつた。交戰參加國數は二十八箇國（聯合國側二十四箇國、中歐同盟國側四箇國）に及び、動員兵數は四千三百五十萬人（聯合國側二千三百五十萬人、中歐同盟國側二千萬人）と數へられ、戰死兵數七百八萬五千人（聯合國側四百四十萬人、中歐同盟國側二百六十八萬五千人）並に重傷兵數五百十七萬五千人（聯合國側三百二十二萬五千人、中歐同盟國側百九十五萬人）と稱せられ、戰費は二千九百四十億圓（聯合國側千九百八十億圓、中歐同盟國側九百六十億圓）と云ふ驚くべき計算に達して居る。その初め人の生るゝや父母の懐に抱かれ、慈愛の陽光によつて育まれ、風にも當てず雨にも濡さず、一本の棘を刺しても大騷ぎして之を悲しむのである。又たその初め人が財貨を得るには、汗を流し腹を減らし、勤儉力行して一錢を溜め二錢を積んで、之を仰いで寶とせぬ者は無いのである。然るに一度び戰爭となれば、屍を山野に曝し、富を砲烟彈雨の間に消盡して顧みないのである。是れは抑も如何なる譯であるか。人間に最も高價なる生命を棄て、最も必要なる金錢を棄てゝも、尚ほ國家は互に格闘して止む時を知らぬのは何故であるか。之を戰爭當事者に質して見るに、甲の論者は自己の國家を生かさんが爲めに他人の國家を侵略するのであると云ひ、乙の論者は我が國家を侵略せんとする國家に對して自國を防衛して此の不義の國家を膺懲する義戰であると云ひ、丙の論者は政府の嚴命によつて戰場に引き摺り出されたので止むを得ず不平ながら戰ふのであると云ひ、丁の論者は戰爭など云ふ馬鹿〳〵しい非合理的行動は絶對的に反對であると云ふのである。此の四種の思想は今に始まつた事では無くて、何時の時代にも有つたので極めて故い思想であるが、今回の世界戰爭に於てこれが最も能く而も世界的に示現された。聯合國側に於ても、中歐同盟國側に於ても、國民

の中には此の四種の思想が嚴存したので、擧國一致の思想と云ふ如きものは何處にも無かつた。是れは何う云ふ譯かと云ふに、戰爭と云ふことに對しては各人の思想が自己の精神裏に於ての四種の形式の何れを採つて之に從ふとも勝手で、互に自己の所說に道德觀を與へて相主張することが出來るから、結局は國民の思想的色彩の上に四箇の黨派を生ずることになる。前の二種は謂ゆる主戰論者となり、後の二種は謂ゆる平和論者となるてある。さうして、一の國家が戰端を開かんとするに當り、その可否を決するには國民全體の直接投票に據るのでも無く、議會とか、元老院とか、內閣とか、若くは元首とか云ふ國家の最高機關によつて決定されるので、その場合に不幸にも平和論者の說が破れて主戰論者の勝利となれば、直ちに兵馬の大權を動かすことになつて、宣戰の布告となる、國交は斷絕するのである。今回の戰爭も實にさうであつた。交戰參加國二十八箇國中に於て、地球上の平地に波瀾を起した最初の責任者とも云ふべき人々は、一二少數の國家の元首とか內閣員とか軍閥とか外交調査委員とか云ふ、特種階級の若干人に過ぎなかつた。其等の少數の人士が外交の衝に當つた時に、如何なる外交問題に對しても須らく國際道德に於ける正義人道に從つて機會均等なる禮讓の中に和議すべき人格者たるべきのに、一時の個人的感情の衝突の爲めに談判を破裂せしめ、宣戰を布告して國交を絕ち、國家の人畜を率ゐて攻城野戰に赴くことになつたのである。その結果として、世界を擧げて合從連衡となり、交戰國數二十八箇國にも及んで、四千三百五十萬人の男子が二手に分れて輸贏を爭ひ、その後方を勤務する老弱男女は無慮數十億人に達したのてある。さうして其の惡戰と云ひ、苦鬪と云ひ、蠻風と云ひ、阿鼻慘狀の程度に於ては古今未曾有の出來事であつた。その上、優良なる無數の壯丁を殺し、國帑を浪費したばかりで無く、不具癈疾の男子と夥多の婦女子とが殘され、且つ一國の產業をして荒癈に歸し、浩々乎たる一古戰場に化したのである。

斯う觀察して見ると戰爭と云ふものは、人類の生活には極めて不安を與へる咀ふべきものであつて、國家の最高機關に居る一部少數の男子は實に當面の責任者となる譯で、文明退步の罪を無條件で負はなければならない。併し乍ら尙ほ一步深く立入つて之を觀察する時は、一部少數の軍閥男子が斯樣に國家機關を獨占して外交を我が意の儘に振舞ひ得るのも、國家生活の知識の上に甚しく缺如せる所のものが有るからである。世界は擧つてカイゼルを憎み獨逸の軍閥を咀ふけれども、それは獨逸聯邦の政治機關の不完全な結果である。開戰と云ふ國家の重大事件に關して、これを國民全體の意嚮に質して決議することを知らぬ日耳曼民族の罪である。卽ち國交の斷絕に關しては、國民議會に於て三分の二以上の贊成を要すると云ふ位の愼重なる規定の憲法を設けて置かなかつた罪である。併し乍ら、獨逸一國だけが斯樣な憲法を制定して置いても、世界の各國が同時に之を制定して置かなければ、平和の目的の達しられなかつた事も明である。それで今次の世界戰爭の根本的責任なるものは、決して獨逸にあるのでも無く、セルビヤにあるのでも無く、交戰國全體の政治機關に於

て大に缺如せる憲法を人類が有するの罪である。けれども又た一方から考へれば、縦令斯様な憲法を交戰國の全部が戰前に設けて置いた所が、世界を通じて男子本位なる現狀に於ては、それても平和の保證の出來なかつたことは明である。何となれば、各國の國民議會に於てその議員の全部が男子であつて、一人の女子をも加へて置かない場合ては、有象無象の男子議員が血氣に逸つて主戰論に傾かぬとも限らぬからである。若しこの場合に際し、男子を戰場の巷に殺すことによつて性的生活の上に大不利益の逆境に陥る女子なるものが、議席の半數を占めて居たならば何うであつたか。男子の戰死に對して絶對的に不賛成で無ければならぬ本能的要求を有する天成の平和主義者を加へて、男女各半數の議員よりなれる代議制を布いて置いたならば何うであつたか。私の意見では今回の世界戰爭は決して勃發しなかつたと思ふ。今回の世界戰爭の起つたのも、亦た今後の國際間に戰爭の起るのも、國家の重要問題をば男女各半數の代議制に據つて議決するの方法を採ると採らざるとの結果であつて、今後の人類が之を國際的に自覺するや否やによつて戰爭は根絶せらるゝと思ふ。

蓋し人類に於ける今日までの政治と云ふものは、悉く男子の手に依つて行はれ、立法、行政、司法の凡てが男子本位であつた。近代文明に於ける憲政有終の美として誇る所の代議制なるものに就いて考へるに、それは男子の代議制であつて女子の代議制では無かつた。人類の一切事業は男女の性的生活の發顯である。代議制はこの人類の一切事業を統治する所の合議機關であるから、議院なるものは性的生活の當事者たる男女の集會所で無ければならない。男女が集會して性的生活の發顯たる人類一切の事業に就いて、大に合議して萬全の策を採らんとすることが、代議制の代議制たる所以でなければならない。然るに今日までの代議制なるものは男子の機關であつて、議院は男子の集會所であつた。それ故、今日までの代議制なるものは人類に於ける眞個の代議制では無かつたので、その結果として有象、無象の男子が集つて慾の爲めに大喧嘩をすると云ふ騒ぎて、それが延いて今回の如き世界大戰役にもなり、七百八萬五千人の男子が横死し、五百十七萬五千人の男子が重傷を負ふたのである。而かも此の男子によつて濫用されたる代議制なるものは、實際に於ては極めて小數の權力ある男子に専斷され、化して官僚政治となり、轉じて武斷政治に陥り、最大多數の男子は慘めにも僅少の武辨に依つてサーベル又は一齊射擊を以て脅かさるゝの奇現象を呈したのてある。總に英米佛の諸國に於て自由民權の思想が行はれ、少數の權力ある男子に左右せらることを免れ、且つ中には女子に參政權を與へ、又た被選擧權をも與へて居つた社會すらあつた。けれども、其れは地方的なもので一般的なものでは無かつたので、殊に女子の身を以て議員として國民議會に列席して、開戰の可否に就いて議政壇上に於て男子議員と議論を上下した者のあることを聞かなかつたのである。よく〱の因果と見えて、男子に濫用されたる似而非なる代議制の結果として生じたる世界大戰争は、實に人類に於ける男子政治の大失敗史であつた。

今や日前に逼つて居る巴里講和會議に於て、英米佛の當局

者が天下第一流の男子として、今後の世界に於ける永久平和の保證を與へようと試む國際聯盟條約の如何なる正文であるかまだ知ることが出來ないが、若し軍國主義を世界より一掃して眞個の意味に於ける自由平等の民本主義を實現せんとする鴻圖ならば、啻に經濟同盟によつて中歐諸國を第二流國に貶せんとする物質的壓迫を講ずるに急なるよりも、大に精神的に交戰國の總てを慫慂して强制平和の擔保として、普通選擧の實を行はしめ、女子に參政權を與へ、被選擧をも與へ、國際同盟諸國は男女各半數の議員より成る代議制を採用して然る上に萬國議會を創設して、男女各半數づゝの議員を男女の人口率に從つて各國より召集するの案を立つべきである。若し否らずして單に英米諸國のみが普通選擧を行ひ、女子に參政權を與へ、被選擧權まで與へ、男女相本位の民本政治を提唱して山中獨善の主義を以て賢としても、自餘一切の國家に於て從前の通り男子本位にして、而も一部少數の男子にのみ中世時代の遺物に過ぎぬ租税制の選擧法を施して百姓代議士を製造せしめて置くやうでは、常に官僚及び軍閥の爲めに飜弄され惡用され買收されて、世界の到る所に於て依然として頑迷なる專制政府によつて軍國主義の跋扈するは火を睹るよりも明かである。ウィルソン、ロイド●チョージ、其他の諸賢に於て若し此の邊の道理を見逃すならば、世界の永久平和を確保すべき千載一遇の好機會を逸するに至り、折角築き上げた五星霜の苦心をして畫餅に終らしむること無きかを怪むのである。此の際何とかして人類永遠の神聖平和の爲めに、各國の情實を排して國際聯盟の本義からして、斷々乎として**此等の正義を世界の萬邦に强制することに吾々は賛成するの**である。

我が國は極東に於ける一島國である。獨の通商港たる青島を陷れ、太平洋、印度洋、地中海の海上警備の任に當り、又たチェック、ユーゴースラヴの道案内者として西伯利亞に遠征し、其の他軍需品米糧等の供給によつて交戰國の一に加つた。けれども其れは程度に於て眞に僅な奉公に過ぎなかつたので、國民の大多數には實感上に於て何等戰爭の氣分がしなかつた。唯だ輸入超過に近因した兌換劵の續發と物質騰貴との現象を見た位なものであつた。けれども、歐洲戰爭の有樣は一々電報によつて報ぜられ、新聞雜誌著述若くは活動寫眞によつて傳へられ、歐米諸國に於ける社會變動の重大事件は隈なく日本國民の全體に知れ渡つた。中にも露西亞と獨逸の革命とは最も深い印象を國民に殘したのであるが、又た交戰國の主なる諸國に於て男女を平等とする普通選擧が常識のやうに提唱されて、女子は既に被選擧權までも獲得したと云ふ報道は最も珍しく感じたのである。その結果として我が國民の間には、自由の思想が普及され、平等の思想が高まり、一方に於ては官僚主義軍閥主義が嫌惡され、民衆本位の思想が大に勃興して官尊民卑の思想が甚だしく弱められたと與に、一方に於ては男尊女卑の思想が大に毀たれて男女兩本位の思想に推移するの傾向を助成した。普通選擧と云ひ、女子參政權と云ひ、女子被選擧權と云ひ、それは今や唯だ時の問題に過ぎぬと云ふ捌けた解釋をすら採るようになつて來た。これはつまり苟も歐米諸國の文明社會に伍して國際聯盟の一員と

して體面を保たんが爲めには、勢ひその政治生活の形式に於ては最上の方法を採つて用ゐなければならぬ天下の大勢に促された結果であつて、國際間の猜疑を避けんが爲めにも、亦た自國を擁護して世界的屈辱に終らざらんが爲めにも、男女兩本位の政治思想は今や道義の大風潮として一大事實たらんとして居るからである。故に吾々日本人は今次の世界講和會議に於て、縱令其れ等の要求を英米佛の諸國より公式を以て和談されずも、既に非公式的な自明原理として自ら進んで此等の文明的法度を施行して、眞個の意味に於て平和を愛し自由を欲し平等を慕ふ世界市民として、天下の尊敬を受け、人類平和の永久的保證者を以て自ら任じなければならない。戰後に於ける我が國の男女問題としては、これが先づ筆頭第一位に議論さるべき事柄であると思ふ。即ち男女問題は國際問題と關係して、人類の男女生活をして眞個の意味に於ける平和の樂園たらしめんとするには、必ず國際間の平和と歩調を一にせねばならぬので、男女道德と國際道德との調和によつてのみ此の大理想は實現さるべき性質のものであることが、今後日本國民の間にも自覺されて來るばかりで無く、この思想は歐米社會より全世界を風靡しながら輸入されて來ると思ふ。ところで吾々の叫ばなければならぬのは、女子の高等教育である。天の未だ陰雨せざるに迨びて、彼の桑土を徹り、牖戸を綢繆すと云ふことである。殊に政治、法律、經濟、倫理、教育等に關する女子の專問的知識が必要である。女子に參政權を與へ、議員の半數を女子を以て滿たし、國務大臣の半數を女流者を以て任ずる新文明的方策を講ずることが世界の輿論になつても、現狀のやうな日本婦人の教育程度では遺憾に堪えないのである。代議士となつて立法權に參與し、國務大臣となつて閣議に列し、或は萬國議會議員となつて國威を辱しめぬ女子が、日本の現狀に於て居るか何うか、甚だ失禮な言草ではあるが、世界の大勢の上から觀れば、さう云ふ結論になるのであるから、是れは日本の女子諸君が、憤起して解決すべき宿題と心得て、充分に研究せられんことを祈るのである。

二　經濟生活に關する男女問題

今次の世界戰爭に於て、四千三百五十萬人の男子が動員されたので、其等の男子の從事して居た職業の大部分は直ちに女子によつて補充された。その結果として、爾來男子の從事して居た職業の全般に亙つて、女子が就職すると云ふ現象を呈して、人類の職業の上には男女の性別と云ふものが無くなつて來た。極めて特殊的な職業を除くの外は、男女共通に從事し得る新事實が證明された。さうして其の成績に於ては頗る優良であつて、各國の軍需局や勞働局からは技術優秀の賞狀を與へられ、又天下第一流の男子からは絶えず讃辭と感謝とが交に雨下したのである。此等は國家の安危存亡に際して男子が女子に應援を申込んだ拜倒しの辭禮とばかりは受取れないので、眞に女子の技術が優秀なるによつて、男子の職業は女子も之を取つて代り得る能力者であることを、歐米の謂ゆる紳士として證明した誠意であること疑ない。又歐米の識者階級の女子も此の邊の消息に就いては、新聞や雜誌や著

述の上に發表して女子の成績を統計的に列擧し、職業上の能力に於ては男女の差別の無いことを證據立てゝ、氣焔萬丈當るべからざる有樣である。是等に由つて觀ても、今や世界に於ける人類の職業なるものゝ大半は、男女共通に從事し得らるゝ性質のもので、男子が獨專して居るべき性質のもので無いことが明になつたのである。而して現在この四千三百萬人の男子に代つて勞働に從事して居る職業婦人中に於て、戰時職業以外の平和職業に從事して居る女子は、縱令戰爭が終熄しても、今遽に解雇放逐さるべきものと考へることは不可能である。假令戰場から男子が續々と歸還しても、俄に除隊させる譯でも無し、徐に歸省させて專ら荒廢されたる産業の復舊事務に周旋して遣ると云ふ方針であるから、女子が勞働市場を去らないことは明である。それが爲めに、今後の歐米の勞働界に於ては益〻男女混淆就職となり、殊に戰死兵七百八萬五千人又は重傷兵五百十七萬五千人に代るべき勞働者は、專ら女子を以て補塡すると云ふ事情は動かぬ所であるから、近き將來に於て産業の復舊した曉には、優良なる男女の勞働者によつて歐米の勞働界が左右されることも自ら明である。さうして若し斯樣な事情になれば、職業上に於ける男女の葛藤と云ふものは消えて、唯だ技術の優劣を以て競ふと云ふ狀態になり、且つそれが自衞の策から資本家對勞働者の問題に移つて行くのである。

そこで是に一の問題を派生するので、新なる意味に於て女子勞働問題が起きて來る。今日までの女子勞働問題なるものは、主に男子の手助けとか獨身女の生活とか云ふ觀念から出發したのであつたが、今後は專ら生命權の上から男女は人生に於て機會均等なる經濟的生活者として、人格的要求として叫ばれるやうになる。これは男女兩本位の道德の當然の結果であつて、女子は人間として女子として國民として世界の民として生きんが爲めに、經濟的生活の上に職業を要求すると云ふ思想に變移して行くのである。單に夫の手助けの爲めとか、寡婦がパンを得る爲めとか、未婚女が結婚費用を拵へる爲めとか云ふ、一種の侮蔑されたる意味の職業としてゞは無しに、人間として自我の人格的可能性を發揮せんが爲めに人生の目的上から批判された、而も經濟的勞働に從事する神聖なる道義的要求としての職業であると云ふ意味になるのである。それで今後泰西の女子が潮の如くに職業的敎育の門前に殺倒し來るとも、それは女子が過剩な爲めに獨身生活の準備であるなどと惡評するは誤つて居る、世界には男子の過剩な地方も多いのみならず、何も男子の尠ないことが女子の米櫃を奪ふ原因にはならない。又た英米佛獨の女子でも、獨身の宿命を自ら招いた譯でも無く、男子の不足より生ずる性的逆境は專ら男子が職業を獨占し、殊に政治的職業を壟斷して居た結果に外ならぬから、今後世界の神聖平和を確保して家庭の樂園を磐石の堅き上に建設せんが爲めに、潮の如くに有らゆる職業の上に殺倒して行くのも道理の有ることである。斯くして經濟上に於ける男女兩本位の思想が全世界を風靡して新文明の天地に赫々として日輪の如く四方に光波したならば、女子の勞働若くは職業なるものは、歸するところ人間として女子として國民として人類として、自己の母權を保護せ

んとする性的行爲に外ならぬのである。是れは男子の勞働又は職業なるものが、歸するところ人間として男子として國民として人類として、自己の父權を保護せんとする性的行爲に外ならぬと同義である。何となれば、男女の個人的生活なるものは畢竟するところ夫婦としての性的生活の爲めの一段階だからである。個人としての男女と夫婦としての男女は、斯樣にして人生の使命に於ては同一の理想に合致すべきものである。ところで夫婦の經濟的生活の問題に移るのであるが、夫婦は各自に個人として經濟的獨立者であつて、夫婦として經濟的連帶者になるのである。それ故、夫婦は各自に財産を有することも出來、又は銘々に職業に從事して收入を得ることも出來るのである。けれども夫婦は經濟的連帶者であるから、互に扶養の義務があるので、夫婦の生活費用の負擔は夫婦自らその任に當らなければならない。夫が妻の生活費を負擔しても可し、妻が夫の生活費を負擔しても可し、又は雙方から之を負擔しても可いのである。戰後の歐米諸國に於ける職業的意義なるものは、全くこの倫理上の考察に根底を有するやうになり、女子は選擧運動に於て、議會に於て、或は閣議に於て、女子勞働問題に關する凡百の要求を提出して、人間としての生活、女子としての生活、國民としての生活の上に、不都合なる待遇や無理無法なる諸條件に就いては遺憾なき改革を加へ、大鉈を振ふことであらうと思ふ。

斯かる天下の大勢に逼られて居る、我が國の男女經濟社會の將來は何うであるかと云ふに、私は樂觀說を唱へる者てある。一部の學者連には、日本の女子勞働問題を悲觀して、絕望說を傳へる者もある。彼等はその意見を發表して、僅少の自由職業を除くの外は資本家と家庭との二重壓迫に呻吟して神經衰弱や肺結核に惱んで、婦人職業としては自滅せんとして居ると云つて居る。けれども、其等の觀察は思はざるの甚だしいもので、經濟現象を自然現象と誤解し、規範律を因果律と異違つて、而も現狀の統計表を過信して、經濟現象の大に社會的道德的のものであることを知らぬ、淺薄なる經濟學者の感想に過ぎないのである。經濟現象なるものは人類に於ける社會的生活の一現象であるから、社會的生活の規範に基いて改廢の自由なもので、一定の人本的なる理想の下に進展して居るのである。正義と利益とは必ず一致し得らるゝものて、東洋倫理學史上に於ては之を義利合一論と稱して居る。この義利合一論から我が國の女子勞働問題を觀察する時は、如何にも現狀のところ正義と利益とは懸け離れて、資本家と勞働者と家庭の妻とは三角形の隅々に立つて沒交涉なやうてあるが、扨てこの正義と利益とが土臺となり柱となつて立體的の活動をなせば、軈てピラミットの如くに巍然たる風骨を露して壯觀極りなきものに成れるのである。日本の職業婦人は暫しの間我慢して、忍耐と勤勉とを以て進むことが前提として必要であり、猥に悲んで居るべき場合て無いことを知らねばならない。

大正二年の調査に依れば、日本の女子の人口は男子三千六百五十三萬人に對して三千五百二十六萬人てあり。その中女子勞働者は千四百萬人である。その中の七割は農業に從事する女子であるが、商工業の方面に從事する女子も年々增加す

るばかりである。その一例を擧げれば纎維業に從事する女子勞働者であるが。この事業は殆ど女子の獨占と云ふ有樣である。大正五年度の統計に依れば、男女職工の人員は左の如くである。

職業別／性別	男工	女工
綿絲紡績業	二六、六三一	一〇三、〇一八
絹絲紡績業	二、八五八	八、七三五
麻絲紡績業	一、六四五	四、二二〇
機織業	五四、六五四	七六七、八四五

大正五年に於ける我國の織物の產額は五億六千四百萬圓であつたから、其の九割と云ふものは實に女子の勞働によつて生產されたのである。又た日本の輸出品の第一位を占めて居る重要國產たる生絲に就いて考へて見るに、大正六年の輸出額では三億五千萬圓であり、その八割と云ふものは女子の手によつて貢がれたのである。大正七年度に於ける我が國の歲計豫算は歲出入八億二千三百萬圓であつたからして、これから推して見ると日本の女子が纎維業に從事しただけで既に國家の歲計だけ働き出して居ると云ふ勢である。日本の國富は今のところ六百億圓であり、一年間の所得は九十億圓であるから、農工商及び其他の自由職業に從事して居る女子の勞働力によつて生み出される國家の收入なるものは、幾十億圓に達じて居るのである。この意味に於て女子は實に國寶であつた。國家の富なるものは男女の共同的勞働るよつて作られたのであるから、國民としての男女の經濟的生活の上には、女子も機會均等に於て男子と同樣に富の分配を受けねばならぬ權利者である。けれども、此の九十億圓と云ふ所得の分配に於て、女子は果して公平なる分前を得て居るか何うかと云ふに、御話にならぬ程不公平な形になつて居る。一例を示せば、大正五年の統計では、農家の雇女の賃錢を月給に見積れば、平均三圓十七錢に當つて居る。目下のところ日本の女子勞働者の勞銀なるものは、農業の方面に於ては無論のこと、商業の方面に於ても工業の方面に於ても、又は其他の自由職業の方面に於ても、男子に比して低廉であつて、その上時間が長く設備も衞生も不完全で、工場法は容易に實行して呉れず、宛然たる奴隷の姿で働いて居る。加之、女子職業の範圍が逼く、且つ家庭に於ける夫の手助けとか、獨身女の生活費の爲めとか、娘達が結婚費用を拵へんが爲めとか云ふ意味から就職して居る有樣である。その中で僅に、女敎員、女醫、產婆、女優、音樂家、繪師、操觚者などの特殊能力者だけが、自己の眞個の職業として從事して居る方で、比較的程度の高い所得を得て居るに過ぎない。是れに由つて觀ても、日本の社會に於ける大半の女子勞働者は、自己の勞働を以て自己の人格的要求から發する個人の經濟的獨立者であると云ふ自覺が無いので、その結果として男子に利用されて極めて低廉なる勞銀に甘んじて、奴隷的に奉公しなければならぬ境遇に陷つて居るのである。つまり日本の女子勞働者には未だ職業に關する自覺力が起きないので、生活に困つた度每に自己の勞務を

一時的に男子に賣るに過ぎないので、男子から生活の保證でも與へられゝば直ちに變節して勞働市場から身を退き、人の妻にもなり妾にもなり淫賣婦にもなり、勞働などは馬鹿々々しいものと考へ、女子の職業などは恥づべきものとして顧みないのである。勞働を侮蔑し、職業を賤視し、而して淫賣行爲を希望して居るのであるから、勞銀の高くならぬのも自然の結果であり、勞働條件の改良される見込の無いのも最なことで、唯だ淫賣料だけが天井知らずに騰るのみである。日本の女子の帶の間に挾んで置く蝦蟇口を開けて見て、若し驚くべき發見をしたと云ふならば、其れは極めて低廉なる勞銀か若くは極めて高價なる淫賣料の孰れかである。日本の女子の經濟的生活は極端から極端へ走つて居る。併し乍ら我が國の女子勞働者が勞働を卑しみ、職業を恥ぢ、極端から極端に走りながらも、一千四百萬人に及んで現存して居る有樣から考へて見れば、女子の經濟的要求の極めて切逼して生活難の甚しいことが想像されるので、又た女子勞働界の苦痛にして慘膽たる光景も髣髴として見えるが如くである。特に個人としての家庭生活に於ける妻と職業婦人としての女工との間に調和が取れぬのみか、神經衰弱にもなり肺結核にも侵され易い境遇に沈淪して居るのである。直接に資本家の憎まれるのも最てある。けれども是れは資本家のみの罪では無く、女子自身の罪でもあり、その他社會一般の罪である。言を換へれば、第一には男尊女卑の結果であり、第二には資本家本位の致すところであるが、歸するところ女子一同に自覺なき爲めであると見るより外はない。女子に自覺なきは敎育の無い結果である。敎育の無いのは親の罪とか社會の罪とか云つて他人を恨むことも出來るが、先づ自己の進取的向上心の足らぬ結果であると見て反省する方が賢明である。日本の女子には男子に對抗して機會均等に於て進まんとする氣慨が無い。一段身分を低く心得て、男子の前に出れば忽ち懾伏して、『女は唯だ和ぎ隨ひて、貞信に情ふかく、靜なるを淑とす』と云ふ思想を、如何にも自分の本能であるが如くに誤解して居る。勿論この誤解を與へたのは男子の仕業であつたが、既う大抵にして日本女子も過去の迷夢から醒めて、破顔一笑して新天地を眺めなければならない。戰後に於ける日本の女子勞働問題もこの女子の自覺によつて解決されるので、女子は自發的に自己決定的に我が身の運命を開くべきある。

三　結婚に關する男女問題

男子に依つて火蓋を切られたる世界戰爭の不幸なる損害に引替へ、泰西諸國の社會に於ては女子の地位が高まり、女子は人間として女子として國民として世界の民として、自覺に一般の進歩を與へ、人格權に於ける自由と平等との道德觀念が普及され、女子に參政權を與へ、被選擧權までも與へ、其他の諸國も風に倣つて同一歩調に出てんとして居るのは、非常なる發達であつた。又その結果として、男女相本位の道德がます／＼確保され、男女は經濟的生活に於ては個人としては獨立者であつて夫婦としては連帶者であり、相互扶養の義務に於て女子の職業が保護され、女子の勞働狀態が面目を一新せんとして居る。ところで斯かる人格的なる男女の自覺は

男女の人生に於ける根本的目的を達する上に一大基礎を與へるものである。今後に於ける歐米諸國の男女生活には、精神に於て物質に於て、初めて對等の社會的生活が全般に亘つて行はれんとして居る。而して其の根本的なるものは、實に男女の性的生活に於て結合せんとする性愛の交渉である。道德に於て、教育に於て、政治に於て、法律に於て、經濟に於て、男女が相本位的に機會均等なる社會的舞臺に於て性的交渉を開始するのであるから、一男一女が性的行爲に關して理想化されたる性欲の實現を求める上に最も都合のよい社會になり、男女交際の間に配偶者を選擇して、自己決定的に戀愛和合するに究竟の地位に置かれることになる。此の意味に於て泰西諸國の男女は倫理上に於ける一夫一婦主義の人格的戀愛を實現することになるので、爾來の結婚制度に對して畫龍點睛の趣を與へるだらうと思ふ。隨つて男女の貞操と家庭の平和とを永久に擁護するを目的とする廓清運動も盛大になり、公娼私娼の撲滅され、禁酒運動が猛烈になつて來ると思ふ。

飜つて日本の狀態を見るに洵に遺憾に堪えない有樣である。男女共に人格の觀念が薄弱であつて、官尊民卑なる上に男尊女卑、一夫多妻、男子本位なる政治法律經濟と連續して居るのであるから、男女の結婚は家族制度の下に男子本位に決行されて居る。男女兩本位に、男女交際の間に、人格的戀愛を以て結婚の眞諦とする大道義的精神は、目下のところ傳道だけに過ぎない。極く僅少の自覺せる有識男女を除き大多數の男女は依然として舊慣の奴隷となり、第三者の媒介によつて理解も戀愛もない無自覺的結婚を爲して居る。離婚の多いのも、姑嫁の爭鬪の絕えないのも、一夫多妻の流行するのも、公娼私娼の繁昌するのも、花柳病と酒精の中毒によつて低能兒の濫造されるのも、皆自然の結果である。

乍然日本の社會と泰西の社會とは交戰聯合國として、又た今後の國際聯盟の一員として益〻接近して來た。殊に全世界の神聖平和を永久に確保する上に於て、相提携すべき同行者たるのみならず、大に通商貿易して國際經濟界に一大飛躍を試みなければならぬ事情からして、國際道德の禮儀としても將た國家の體面を保つ上の自制としても、進んでは思想界に於ける世界の牛耳を握らんとする抱負から見ても、日本國民の結婚制度の上に大改革を施さなければならない運命に達して居る。先づ家族主義と個人主義とを折衷して極めて不調和なりし現行民法の婚姻法を改正して、世界の常識に從ひ男女道德の大本に基いて規定し、眞個の人格主義の上から一夫一婦の相本位的原理に由來する人格的戀愛の理論に率由して制定しなければならない。斯くして道德と法律と經濟とが一致して、初めて日本社會の眞正なる結婚制度が施行され、世界の文明社會と步調を一にするに至るので、我が國に於ける將來の男女も男女交際の間に自覺的に戀愛結婚を行ひ、理想の家庭を地上に建設するに最も有利なる地位に置かれる者である。戰後の日本社會の男女が、世界の平和に關する男女同權の政治的方策を施行し、經濟的生活に關する男女相本位の職業に精勵し、一夫一婦の人格的戀愛に基いて結婚するにある。

戰後に於ける日本の男女問題としては、先づ以上の三者を統一的に了解して、銘々に自覺せる徹底人と成るとてある。(完)

文明改造と婦人問題

三輪田女學校長
廓清會評議員　三輪田元道

□職業上の對立と婦人問題の兩潮

歐洲諸國では、これ迄でも人口の上から云つて女子の方が多かつたのであるが、這度の戰爭で約一千萬に近い男子が戰死し、又は負傷て不具者になつたりして、未だ確實な統計を見ることが出來ないが、今日は各國とも何百萬といふ男子の數が減つてゐる。そしてそれ等出征の男子が執つてゐた職業は、婦人が取つて代つてそれ〴〵の仕事に從事してゐたのである。今や平和の曙光が射し初めたので、軈ては戰場から男子が歸つて來るであらうから、男子と婦人との間に職業上の爭鬪が起ることであらうと思はれる。

戰爭の結果は、歐米の婦人の生活が家庭的といふよりは社會的にまで擴大されて來た。即ち婦人が男子同樣外で働いたものだから、晝の食事ばかりでなく晩の食事でも自分の家の臺所でするよりか、レストラントで濟ます方が都合がよいといふので、家内で煑炊きをすることを止めるやうな、大仕掛の經濟生活が從來の家庭生活を打壞しつゝあつたので、この惰性が少くとも從來の歐米人の家庭生活を動搖させることゝ思ふ。加之、婦人も靜としてゐるよりか、何か適當の職業を求めるやうな傾向になつて來るから、又そこに職業問題を中心としての家庭生活の改善が行はれるやうになることであらう。

そこで一部の識者から婦人のこの種の傾向に對して「家庭に歸れ」と叫ぶ聲が必要上起ることゝ思はれる。と同時に時代の趨勢だからといふので、反對に「社會に出てよ」と進取的の聲援が出るであらう。「家庭に歸れ」と「社會に出てよ」との、婦人を中心としてのこの二つの反對な叫びが、少くとも戰後の歐米の社會に喧しい呼び物になるに相違ない。教育家も政治家も、この二つの問題の何れかの主張者として論壇を賑はすことと思はれる。即ち婦人參政權に反對する婦人は婦人の家庭に歸ることを叫ぶであらうが、贊成者は進んで社會へ出てよと絕叫することになるであらう。

□日本將來の婦人問題

要するに戰後は勞働問題よりも婦人問題が一層重大な問題として表はれることゝ思ふ。男子の數が戰爭で減つたので、男子側の勞働問題は特に勞働者が虐待されるとかいふやうなことなしに濟むことであらうが、勞働問題のこの領域が婦人

の職業問題で塞かれるであらう。かやうに婦人問題が呼び物になると、從つて婦人も自己の意思の現在を認めるやうになる、單に選擧權を得ることにのみ滿足せずして、婦人も政治上の運動に參與しなければならぬといふ衝動を感ずるに至るであらう。從つて男子と共に堂々と論議を鬪はし、遂には性を基礎とした差別觀を打破し、從來の婦女子だから出來ない等と考へてゐた偏見を捨てゝ、男女の如何を問はず能力本位の思想が流行し、男女の職業上の區別よりも適者が適所を得て働くやうな風になりはしまいかと思ふ。

飜つて考へると、日本は今日では未だ男子の方が多いので、歐米諸國とは稍その狀態を異にしてゐるのは仕合せのことであるが、戰爭の影響からして、女子と雖も安閑として家居することの不利益であることを認める樣になつて來る、出來る丈け女中も減らして働かなければならないといふ風になつて來ることは、否定することの出來ない事實であるやうにおもふ。由來日本の婦人は長い習慣の結果、何事にもイエスといふことは敎へられて、ノーは云へなかつたのである。所が將來の吾々の生活は社會的に否を主張しなければならなくなつて來る、從つて婦人の是を是とし非を非とする判斷を明確にさせることが大切である。今まで男子が玩弄視してゐた女が否を主張する結果、男女間の不調和も起り勝ちて、生活に伴ふ習慣の新舊の衝突が起つて來るのは又止むを得ざる現象であらう。併し乍ら婦人の人格を語むること、之れが何より根本とならなければならぬ。文明改造の婦人問題的方面は、之を根底として人類の福祉を增進して行くにある。

◇新渡戶博士曰く　我日本でも西洋の經驗に促されて、將來婦人の職業問題が持上り相當の職業教育を施さなければならぬことになるでありませう。この點から丈けでも、從來の良妻賢母一天張りの女子教育の目的は美事に打破られたと云はなければなりません。一部の識者達は夙に我國女子教育の目的の偏狹な點を力說してゐましたが、それが意外な事にも今次の戰爭によつて、事實に於てその誤れる點を確實に證明せられた譯であります。かくの如く女子教育の方針に變動が生じつゝあるとはいふものゝ、今日の日本の女子教育はまだ〳〵その教育たる一つの裝飾品の如き觀があつて、嫁入道具の一つに過ぎない。

今回の講和會議を見ても日本は今や正に世界列強に伍して平等な機會と待遇とを與へられて、大使の人物に於ても決して人後に落ちるやうなことはありませんが、若し婦人界の方でかういふ問題が起つたとしたら何うでありませうか。世界に於ける日本の位置を永久に保つてゆく上には單に外交上のみならす、婦人界に於てもさうした人物の缺乏があつては體面上大變な差支になります。

◇安部磯雄氏曰く　元來婦人は家庭に於て子供の養育に專心働かればならぬ時期には家庭以外に働くべきものでは無い、家庭をもつて外に働く場合は、例へば結婚はしたが子供が無いとか或は子供が成長して母親の手が全く離れたと云ふ時に初めて婦人は家庭以外に活働が出來るのです、處が今日の婦人の社會に働く立場はこれ等の點から脫して、健康の許さぬ者でも非常の活動をして居る場合が多いのです、左樣かと思ふと一方には婦人の活動を否認して、家庭にのみ引込ませやうとしますが、是れは全く男子の勝手な考へに過ぎません、前者にしても又後者にしても婦人をこの狀態に置く事は社會の非常な損失です、次には婦人の勞働について最も懸念する事は婦人の俸給の少い事と、勞働に對する健康が氣づかはれる事です、又是等多數の人の集まる勞働の場處なり工場等が現在では健康に適してゐない。次には婦人の參政權問題に逹する譯です、凡て自分の事は自分でする事が必要で貧民が其立場を良くするには貧民自ら其法律を作らればなりません、婦人も子供の敎育をして居る間は安心して社會に立つて居られるが、さて子供から離れて活動を試みやうとする時にはその働きが男子と同等の能力があれば報酬も必ず同等でなければならぬ、殊に健康狀態は是非法律の力によるの外ないのですからこれ等婦人の位置を改善する事の必要な以上婦人の參政權は當然與へらるべき筈であります。

文明改造と勞働問題

廓清會理事　油谷治郎七

□勞働階級の自覺運動史

近世歐洲に於ける勞働階級の進展の過程を大觀するに三大時期の忘るべからざるものあり、第一は一八四八年の革命後である。一五一七年の宗教改革は社會的に評すれば封建諸侯が法皇なる大勢力を破りて、其領地に自主權を確立する運動であつて、大地主が政治的に其權力を發揮したのであつた。一七八九年の革命は封建的社會組織を打破りて平民の自由と權利とを獲得せる運動であつた。されど此平民は所謂ブールジョア(市民階級)であつて、プロレタリエ(勞働階級)の自由と權利とは同等に承認されなかつた。かほどまで人權を主張せる佛國に於てルイ●フイリップの時代に三千萬の人口のうち撰擧權を有するもの僅に二十萬人に過ぎなかつた。公立學校は有產階級の支配の下にあつて、勞働者の子弟は公教育に預る特權を有さなかつた。一八四八年の革命は實に勞働階級が有產階級の權力特占の不公平を破らんとせるものである、ラサーレは一八四八年二月二十四日を以て新時代の黎明期であると述べてゐるが共產黨宣言が此年に於て發表せられたのみでなく、蓋し此時に於て勞働者は招かれて佛國臨時政府に入り、此政府は國家の目的は勞働階級の運命を改善するにありと宣言し、一般に普通撰擧權を許したからである。第四級團の解放劇は此時に於て其序幕を開いたと云つてもよい。

第二は一八六四年前後の活潑なる勞働運動時期の後である一八六二年彼のラサーレは伯林に於て「勞働者綱領」を發表し其が爲に入獄の禍にかゝつた。「勞働者綱領」は勞働者の福者と呼ばれたものであるが第一、普通選擧。第二、勢力の平等なる分配と社會の道德的革新とによりて階級的利害關係を仲和すること。第三、國家及び人民の擴大を計り個人として到達しがたき教育と勢力と自由とを多址に獲得しうるものたらしむることを主張せるもので、今日より見れば何等驚くべき危激なるものではないが、當時に於ては革命的危險思想と見做されて刑に處せられたのである。一八六三年には佛國に於てプルドーンの門弟たる勞働者トレーンは獨立勞働黨の候補者として選擧場裡に奮闘し、獨逸に在つては同年五月二十三日一般獨逸勞働者同盟は組織せられた。乃ち社會民主黨の誕生を見た。同年英國に於ては職工組合の國家的同盟は成り翌一八六四年二月十一日には巴里の勞働者六十人は獨立勞働者の代議士を擧げんために堂々たる宣言書を發表した。プル

ードンは此日を以て勞働運動史に記念すべき時なりと述べてゐるが如く、佛國の朝野を震駭せしめたとは少々てなかつた。

□勞働運動のマグナ・カルタ

而して同年九月に於ては倫敦マーチン・ホールに於て國際勞働者協會は組織せられ、勞働階級の解放は唯勞働者階級の手によりて成し遂げらるべしと叫び、階級的支配を撤廢し、國際的に團結せる勞働者の勢力を造つて經濟的獨立を得んと圖る運動は開始せられた。マルクスの資本論の第一卷の公刊せられたのは其より三年の後、卽一八六七年のことである。其後五十年間、歐洲の勞働階級は社會的にも政治的にも又經濟的にも侮るべからざる勢力として着々其地位を高め、或は社會黨として、或は職工組合として、或は無政府黨として、或は共働組合として、著しき活動をなせるは述ぶるまでもない、第三は最近大戰爭の影響である。露獨に於ける社會革命は、勞働階級は其中心勢力であり、勞働階級が經濟上及び政治上の支配權を握らうとする運動であることは云ふまでもない。勝利者たる英國に於ても、勞働黨が昨年六月の大會に於て發表せる社會改造の綱領は「新マグナ・カルタ」と稱せられてゐるが、職工組合の運動に於る最近の趨勢を徵するに足る。勞働階級が戰後に於ける要求を網羅して殆んど餘すなし全體は二十七章より成つてゐるが、其主なるものを摘記すれば左の通りである。

一、生産の擴大を計ること。

二、生活標準の維持と保護の爲に凡ての職業に生活費を支ゆるに足る國定の標準賃銀率を設けること。

三、除隊さるゝ多數の海陸兵士には歸鄕汽車賃を免除し、直ちに就職の道なきものには、國立保險に從つて失業保險料を給するのみならず、一ケ年間の失業者保護金を給すること。

四、約三百萬の軍事工業に從事せる勞働者のためにも解傭と共に適當の保護策を設くること。

五、戰時のために一時中絶せる職工組合の條件を回復すること。

六、失業の豫防。

七、失業保險法の回復。

八、婦人の全き解放、經濟上及び法律上。

九、個人的自由の回復。

十、政治上の改革、(イ、全き丁年男女の普通撰擧權。ロ、男女の別なき同等の參政權。ハ、比較撰擧法。ニ、海陸兵士及び官吏にも同樣の政權。ホ、上院の全廢。)

十一、アイルランドの自治。

十二、憲法を改正し、アイルランドと共にスコットランドウエールス、及びイングランドにも地方議會を設け、ウエストミンスターのパーリアメントを大英國の聯合議會となす事

十三、地方自治制の改革。

十四、教育制度の國民化。

十五、適當なる勞働者住宅の供給、戰後互に五十萬の住宅の供設。

十六、救貧法の廢止及び衛生大臣の新設。

十七、酒類釀造の官營と節酒策。

十八、交通及び運輸機關を國家の支配とす。
十九、工場及び家庭に電力、電燈及び熱力を最低價にて供給するため發電所を國家の管理とす。
二十、炭鑛及び鐵鑛の國有。
二十一、生命保險の官營。
二十二、食料の調節。
二十三、資本主義的產業を政府の管理に移し、產業の組織及び管理と其運營及び利益及び代價等の監查權を國家の掌中に收む。
二十四、一千磅以上の財富の累進的徵發と土地及び集積せる富に對して直接稅を賦課して莫大なる國債の償却にあて、食料及び生活必需品の課稅を除く。

以上唯其要綱を列記したるに過ぎず詳細なる實施的方策を略したが、是等を以て、彼の社會革命的思想なりと見做されたるラサーレの「勞働者綱領」と比較すれば、又以て勞働者階級の進步の著しきに驚かざるを得ないであらふ。是等を以て、產業の支配權を全く職工組合の掌中に收めんとするサンデカリストの理想と比較すれば、固より相去ること小なりと云ふべからず。然かも是等を以て、ステートソーシアリストの主張と對照すれば、其相隔つるところの甚だ少さを感ぜずんばあらず。即ち其手段は主として言論と立法に依らんとする穩健なものであるが、其目的は特權を有する有產階級の獨占的利權を國家の支配に移し、國家の政治機關を左右する勢力を除んとして勞働階級の手に收め、以て社會的政治的に又經濟的に勞働階級の優秀なる地位をつくらんとするのである。職工組合が先きに單に勞働條件の改善を叫び、又は進んで利潤の分配に與かるを以て無上の喜とせるものに比す又同日の談にあらざるを解するであらふ。

□日本に於ける勞働狀態

飜て我國の勞働狀態を顧みるに其社會的地位に於て、其政治的勢力に於て、又其經濟的狀態に於て、殆んど言ふに忍びざるほど憫然たるもので、概して言へば、一八四八年に達せざる以前の歐洲勞働者を憶はざるを得ず、英國のウエッブ夫人と共に日本の勞働狀態は英國のものより後るゝこと七十五年と評するも不可ならず。殊に歐米の勞働者は戰時に在つては、工場を戰場のみならず、政治機關に於ても其樞機に參し、大戰の決定的勢力であつた。同時に又戰後の問題も、戰前とは別なる幾多の大にして又深きものに面してゐる。我國に於ては戰時の特徵としては、產業界の好況に伴ふて、(一)一夜造りの多數の勞働者の出來たことゝ。(二)賃銀の增加、戰時手當及び時間外又は受負仕事によりて、多少潤澤なる收入を得たることと、(三)勞働者の需用が其供給よりも更に多きが爲に失業の憂少かりしのみならず、其權利を伸張する機會の多かりしこと。(四)事業に利益多きため、勞働者足止策又は引着け策のため、或は勞働功程增進の目的より、或は又勞働者を思ふ經營者の至情より其他種々の動機より勞働條件に多少の改善を見るに至れるとなどは其主要なるものであらう。從つて大戰終結後に於て勞働者階級の問題たるべき處歐米の夫と大に軒輊のあるべきは推察に難くはあない(以下次號)

文明改造と法律制度

法學博士　大場茂馬

□一分五厘の立憲政治

デモクラシーの思想は今や世界に横溢してゐる。多數の人殘らずが本位となり、共通の安寧幸福を圖つて行くのが民本主義であつて、其反對は少數の人の支配と多數の人の奴隷的狀態といふ事に歸する。

立憲政治の根本をなすものは選擧である。選擧によつて始めて國民の意志の代表を見るのであるが、然るに少數の人のみが之に與り、多くの人が與らぬといふことであつたら、少數の爲めには立憲政治でも、多數の爲めには勿論非立憲政治と謂はねばならぬ。翻つて現行の我が選擧法を見るに、日本人民中百分の一分五厘だけが選擧權を有ち、九十八分五厘は持つてゐないのである。して見ると即ち一分五厘の立憲政治であつて、九十八分五厘の民意は代表されて居らぬことになる。苟も立憲政治といふ以上、原則として先づ國民全部の意志が代表されて居なくてはならぬ。無論其中には權利を與へられない種類の者はある。未成年の如き、智力不完全なる精神病者の如き然りである。元來選擧は判斷である。何人が代表者となつて意見を發表するに充分であるか否かを判斷するものである。故に判斷の力ない者には與ふ可きでない、子供に與へないのは其爲めである。更にまた權利を與ふ可からざる種類がある。犯罪者の如き、浮浪者の如き、國庫の救助によりて生存しつゝある貧民の如き然りである。斯かる缺格者若くは無能力者を除く外は均しく權利を與ふべきものである。我々は一言にして云へば能力者には凡て之を與ふべし、無能力者には選擧權を奪ふ可しといふのである。奪ふといふと穩かでないが、能力のない者に與へるのは、見えざる者に見よと云ひ、歩き得ざる者に歩けと强ゆると等しく、無理である。そこで又國民教育も受けない者には與ふ可からずとの論を生ずるが、不能を責めないといふ上に於て成立ち得るのである

□選擧權の複數を主張す

乍併公平を叫び理論を極端に貫徹せんとするより生ずる弊害は之を避けなくてはならぬ。社會には多數の無識階級がある。また無産階級の者が合同して國家の秩序を紊す事は、普通選擧にあり得る弊害である。故に一面公平を期する上に於て、一面弊害を避くる上より、吾人は選擧權の一種の擴張

若くば複數を主張せんとする者てある

一體公平といふことは、各人皆同一といふことを前提とするに非ざる以上、公平に似て却つて不公平てある。智識ある者と智識なき者も同一と見るは公平てはない。我も人なり彼も人なりと視るはよいが、國家に貢献ある者と然らざる者と混同するは公平てない。多額の租税を納め國家の費用を出資する者と、少額の出資するものと一樣に見るは公平に似て不公平てある。誰も彼も汚い家に住ふといふは公平に似て不公平てある。誰も彼も大厦高樓に住ふも亦公平に似て不公平てある。智識の淺深貢献の大小出資の多寡を認め、各人平等の水平線に立つてゐないといふ前提を以て、平等の取扱を主張するは畢竟似非公平てある。

即ち此意味に於て選擧權に等差を設くることを主張する。先づ國民教育を了へたる者には必ず一票を投ずるの資格を與へる。而して高等の教育を終へた者には二票を與へる。更に高等の教育を受けた者には三票を與へるのてある。又一錢たりとも國税を納むる者には必ず選擧權を與へる。中等の租税を納むる者には二票を與へる。更に最高の租税を納むる者には三票を與へるのてある。之れ必ずしも不公平てないと思ふ。また兵役の義務を完了したる者には一票を與へる事にしたい以上最高を以て七票とするのてある。

□選擧より生ずる弊害の芟除

普通選擧はデモクラシーの理想に叶ふものであるが、之が實行上には弊害の伴ふを免れない。即ち多數の無智階級を跋扈跳梁せしむる。彼等は黨を組み派を結んで露西亞若くば獨逸の過激派の如くなるならば、日本の安寧は得られないのてある。故に吾人の制限によれば、元來無智の者――國民教育も受けざる――は未成年者と同じく無能力として與へない。次に全然無産の者にも與へない。無學無産に至らざる程度の者が各一票てあり、相當教育あり相當資産ある者は五六票を有するから、無學無産に近き者百人集まるとも、智識階級中産階級の二十人に如かざることゝなる。斯くの如くにして所謂衆愚政治の弊害は脫し得るてあらう。

次に吾人の案によれば、賣收の弊を根絶する。日本國中の國民が平均三票づゝのものとすれば、六千萬の中の未成年者や全然無産者を除きたる四千萬人は、一億二千萬票の多きに達する。之を議員四百人に分たんか、一人の投票數三十萬てあつて、三十萬票の賣收は如何なる人にも行はれぬ。從つて其他の情實も行はれず、言論文章によりて輸贏を決することゝなる。黨を組み派を結びて下らぬ人物を擧げんとしても三十萬の人を動かすことは出來なくなるのてある。

一面には又學問の奬勵となる。勤儉貯蓄も奬勵される。兵役の義務も尊重される、學問あり資産があつて六票を有する上に、兵役義務によりて最高の七票に達し得るとなれば、自ら兵役義務は奬勵されるのてある。

故に吾人は大戰後の新文明樹立に就ては、先づ選擧權の擴張を主張する。現内閣に企てらるゝ如き不徹底なるものを拒否すると共、普通選擧のに弊害に陷らざる複數制度の採用を

叫ぶものである。

□國民裁判制度の主張

更に進んで國民裁判のことに至れば、凡てが民本主義で、凡ての官署の組織が人民と政府が共同して行くのである。今日は官僚と稱する少數の者が主人となり、多數の民衆は奴隷に近き狀態にある。今日の裁判制度の如きは全く之れ官僚主義であつて、裁判所獨り尊く、封建時代と擇ぶ處を知らないのである。吾人は文明改造の大機運に掉して、國民裁判の採用を呼號しなくてはならぬ。而して其の國民裁判たるや、古臭き陪審制度に非ずして、寧ろ參審制度である。

歐洲古代てありては、各國共に刑事訴訟の根本原則として彈刻主義を採用した。然るに社會の推移は漸次糾問主義を採用することになつたのであるが、其極、拷問、不柔順刑、嫌疑刑等を濫行し、甚しきは官權の威迫を恣にするの機關としてすら濫用せらるゝに至つたので、遂に國民裁判の採用となり、歐洲大陸最近二十年前後に於ける立法例は、大體に於て依然國民裁判制度の存置にありと云ふよりも、寧ろその擴張にありといふを妥當とするの現狀にある。而して其の國民裁判の制度は、陪審制度より參審制度へ進み來つたのである。

□陪審制度の長短

陪審裁判所の制度の長所とすべき點は、一般民衆をして裁判事務に干與せしむるを以て利點となす處にある。從つて陪審員の長所は、陪審裁判所の長所と切離して考へることが出來ないのである。左に陪審裁判所の長所を掲ぐれば、

第一　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、官權を以てする司法權濫用の弊を避け、又は斯くの如き濫用あるべしとの不信用を避くることを得る所以である。

第二　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、民衆と法律との離隔を避け、一般民衆をして裁判所を信頼するを得せしむる所以である。

第三　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、刑の言渡は公正にして且つ必要なる所以を、周知せしむることを得る所以である。

第四　刑事裁判に陪審員を認むるは、立憲制度の趣旨を貫徹し妥當なる裁判を期待することを得る所以である。

第五　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、一般民衆を支配する法律的常識を利用し、一般民衆の滿足する裁判を期待することを得る所以である。

第六　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、裁判手續を鄭重にし判決の信用を増大ならしむる所以である。

第七　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、直接審理主義及び自由採證主義の貫徹を期待することを得る所以である。

第八　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、判事の經驗を主とするより生ずることあるべき誤判を匡救することを得る所以である。

第九　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、常識に遠ざかり又は迂濶なる事實認定を避け、事實の眞相に合致することを得る所以である。

第十　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、有罪的豫斷を避け公平なる裁判を期待することを得る所以である。

第十一　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、嚴刑酷罰の濫施を避くることを得る所以である。

第十二　刑事裁判に陪審員の干與を認むるは、被告人の甘受せざるを得ざる裁判を期待することを得る所以である。

方今文明各國に於て行はれた陪審裁判所の制度は、多種多樣であつて、從つて其制度に存する長短も亦一樣ではないけれども、陪審裁判所の制度を採用する邦國に於ては裁判事務を判事及び陪審員の兩者に分擔せしめ、陪審員に判事と對等の地位を與へ、陪審員は判事の教示を受くるも之に從ふの義務なく、又その評決は確定力を有するもので、判事は例外の場合の外、絶對的に之に服從しなければならぬのを普通とす

る。しかしながら斯くの如く裁判事務を分擔せしむるは、裁判に就て二個の主腦を認むることゝなり、その結果匡救することの出來ない不都合なる結果を生じて來た。そこでこの陪審裁判所の弊ある處を排し、その長を採つた參審制度なるものが産れて來た。參審制度の理想とする所は、陪審裁判所の制度に存する長所は悉く之を收め、其短所は之を避くるにある。

□參審採用は世界の大勢

そこで果して參審制度は其理想を貫徹し得るや否やを攻究せんとならば、第一參審裁判所の採用は、陪審裁判所の制度に存する長所は悉くこれを收め得べきや否や。第二參審裁判所の採用は、陪審裁判所の制度に存する短所は悉くこれを避け得べきや否や、第三參審員をして刑の量定に干與せしむるは、これを相當なりとすべきや否やの三點に就て考へねばならぬ。

第一の問題に就ては、大體に於てこれを肯定しなければならない。陪審制度に存する長所は、多くは事實認定に關する陪審員の長所であるから、若し其長所を充分發揮せしめんとするには、陪審裁判所の如く陪審員のみをして罪責問題の解決に當らしめ、判事をしてこれに干與せしめざるを以て適當となすの議論の餘地も存するが、若し陪審裁判所の長所にして爭ふべからざるものとなりとせば、參審裁判所の事實の認定は、これを判事のみを以てする通常裁判所の事實認定に比し遙に優れるものと云はなければならぬ。次に第二の問題に就ては、これも亦大體に於て肯定しなければならぬ。參審裁判所に於ては、參審員のみにて罪責問題を解決するに非ずして判事と合議してこれをなすべきものであるから、陪審員の任務遂行に關する短所は殆んど之を避くることを得べしと云ふも差閊へない。第三に就て參審員をして刑の量定に干與せしむるは、これを參審裁判所の長所となすべきか將た又その短所となすべきかは、通常裁判所と比較して、其孰れが最も適當なる量刑をなすに適するやに依つて決せらるべきものである。凡そ刑の量定なるものは、判事が主觀的に相當とする所に依つて決するよりは、寧ろこれと共に其量定せらるべき量に對する一般民衆の感想如何を斟酌して之を定むべきものであつて、一般民衆が認めて不當に輕きものとなし又は不當に重きものとなすが如き刑は、假令判事の主觀的見解よりしてこれを相當とすべき場合と雖も、これを言渡してはならない。故に第三の問題も、これを肯定すべきが至當であると思ふのである。

以上述べたる如く國民裁判制度は、現時歐羅巴各國に於ては殆んどこれが實行せられざるの國なく、未だこの制度にして採用されざるは世界に於て僅かに日本と支那及びトルコ等に過ぎざる狀況にあり。吾人は人權尊重の時代思潮に後るゝことなく、我國に於ても公娼制度の如きは云ふも更なり、着く々改良すべき諸制度は速かにこれを改め、在來の官僚的制度を一掃し、民衆の一般意志を基礎とする法律制度の行はれんことを切望して歇まない次第である。

文明改造と殖産興業

□□産業問題の前に先づ禁酒を唱道す□□

農學博士　矢作榮藏

■産業上の競爭が□益々劇甚となるべき傾向■

酒が有害なる嗜好品なることは、一般に認むる所なるを以て、殊更に申上げる必要は無い。然し酒は誰にも有害だが、身體や精神の充分に發達してゐない未成年者にとりては、一層有害である。特に今日以後は世界の平和が確保される制度がてきて、武力の競爭は、或は少くなるも知れず、少くなるを大に希望する譯であるが、平和なる產業上の競爭は、益々劇甚となるものであると考へざるを得ぬ。それ故に次の代を引受ける未成年者は、今日までの人々の如く、酒を飲むといふやうな惡習慣に染まないやうにすることは、特に必要だと考へるのである。それ故に未成年者に對して特に禁酒の必要を力說したいのである。

■中流以上の禁酒□產業組織を改善すべき必要■

中等以上の階級の人に對して、成るべく禁酒することを望みたいのである。下級の人に對しても、禁酒は望ましいのであるが、然しこれに直に一般に要求するは少々無理かと思ふのである。何ぜなれば、中等以上の人は、酒を呑まなくても、幸福なる生活を送るものにて、相當に設備の具はれる家屋を有してゐる。酒を飲む以外に、音樂とか芝居とか、文學とか美術とか、これ等のことを娛しむ機會もあり、また愉快なる社交、家庭生活を有つ故に、充分なる慰安と娛樂を有つといふことができる。生活の基礎が、比較的安全である故に、酒に醉つて憂を忘れねばならぬ境遇には居らない。然るに下級社會の人々は、生計の爲に忙殺されて、過度なる勞働に服したり、或は極めて單調なる生活を送る故に、その往宅といふものも、極めて不愉快なもので、愉快なる社交を有つものも少い。加之酒を飲まない愉快なる集會場は備つてゐない。酒に代はるやうな飲料、味のいゝ廉價なものは餘りない。またその平民圖書館、平民倶樂部といふものも、充分に備はらぬから、居酒屋、或は飲食店は、彼等にとりては、唯一の社交倶樂部であるといふ狀態である。彼等は生活に餘裕が少いのみならず、生活の基礎が安全でない。であるから疲れ切つた勞働者は、酒を飲むことによりて、一日の勞を慰め、また彼等の不安なる生活狀態を、醉つてゐる間だけでも忘れるといふことは、彼等にとりて、或は止むを得ない遁げ路てあるかも知れぬ。ですから出來るならば、社會の指導者を以て

任ずる中流以上の階級のものは、奮勵努力して、大に生產の技術、組織を改良して、有形的の富の增進を計りて、又その富の分配の方法も、改良を加ふべきものあらば、改良を加へて、醉つて苦痛を忘れなければならぬ、不安なる狀態を一時だけでも忘れねばならぬといふやうな階級は、一人もないことにせねばならぬ。そして其の醒めて居ても、充分に疲勞を恢復し、醒めて居て充分な娛樂と慰安が得られるやうな生活狀態を、凡ての人に與ふることを努めねばならぬ。今日歐洲諸國で極端なる思想が、自然勢力を得つゝあるといふことは、極めて憂ふべき現象である。過激思想は成るべく我國に入ることを防がねばならぬ。而して健全なる思想を維持してゆかねばならぬは勿論であるが、然し翻つて、中等以上の階級のものとして、自ら反省してみると、この過激思想の起つて來つたことは、いろ〳〵の理由があるも知れぬけれども、一面から觀れば、下級の人民は、中等以上の階級に對して、これ迄持つてゐたる信頼の念が、減じたものだと思ふ。（或はその甚しく過激思想の勢力ある國では、下級民が中等以上の階級に對して、不信任を表して居るのだといへるかも知れぬ）てすから中等以上の階級は此の如き時代には、先づ自ら反省して、これ迄社會の指導者の地位に立て居たが、その地位相當の責任を盡したりや否を考へ、また下級社會の模範たるだけの高遠なる理想を以て、自分の有てるだけの全力を自己並に社會に對して盡して居たか否かを顧みる必要がある。耶蘇の最後の聖餐の時分に、この中一人私を賣るものがあるといつた時、耶蘇の使徒等は、いづれも自ら内に顧みて怖れを抱いて主よ我なるかといつて訊ねたといふ。耶蘇の使徒の如き高尚なる人でさへ、此の如くであれば、多數の中等民が、極本心から考へて内に顧みて少しも懼れを抱かない確信のある人は、極めて少數に違ない。過激思想は不都合だ、社會革命は不道德だといふ人は、先づ自らその社會を指導するだけの任務を盡してゐなければならぬ。下級社會に對して、模範とするだけの心掛けと、品行と、努力をしなければならぬ。それで中等以上の人は、概して下級社會の人よりも、多くの點に於て優れてゐることは許さなければならぬが、凡ての人はその社會的地位相當の責任を盡してゐるか、何うかといふとになれば、内に顧み疚しきもの少くないと思ふ。さうであるから中等以上の人は今日は餘程心を締め直して、眞面目に奮勵努力せねばならぬ。然し物事はいかに遠い路も一歩より始めねばならぬから、私は中等以上の階級の者が、先づ第一に始むべきことは禁酒であると思ふ。今日よりは眞面目に緊張した態度で以て、物事を考へ、油斷のない努力をしなければならぬ。その上に中等以上の人は、前にいつた如く、醉つて苦痛を忘れなければならぬことはない。そんな苦痛を有つてゐない。醉ふこと以外に、健全な優美な娛樂が得られるのである。その上に今日の社會の組織でいふと、社會の指導者が善ければ、その社會に於ける效果が非常に大なり、特にその經濟上に於ては、有爲なる技術者、優秀なる企業者は、一人の力で、多數の人の力を有益に利用する故に、その效果非常に大いといはねばならぬ。ですから優秀なる階級の能率を害する如き、有害なる飲酒の風習は、成るべく速に除去す

る必要がある。今日の世の中では下級の人も、中以上の階級に進むことはできるけれども、然し乍ら中流以上の階級の子弟の多數が、又次の中流以上の階級を占めるのである。將來のことを考へれば、尚一層中流以上の人は、早くこの惡習慣を脱する必要がある。然るに我國では、中流以上の階級に、飲酒の習慣を持つ人が多いのみならず、觀様によつては、凡ての社會の進歩の最も大切なる基礎である處の産業の經營に任じて居る産業界の優秀の人物が、その社交上の必要だと稱して、酒びたりになるものが多いといふことは、極めて憂ふべき狀態である。只それだけならば好いけれども、我國では中流以上の人は酒の中で、最も有害なる高度のアルコールを含む蒸溜酒を輕蔑して飲まなかつたものだのに、然るに今日は、西洋の惡風習を輸入して、ウヰスキ、ブランデー、その他の各種のリクールスを用ゆる風習が、益々普及するは極めて憂ふべき現象である。

■米作高と消費高□

□酒飲は岡半、増貫以上の害■

我國の食料問題の解決方法としても、酒を飲むことは、成るべく之を制限し、成るべく早く止めたいのである。止める必要がある。今年は一昨年と昨年は餘り豐作でなかつた、その上に大正五年以來雜穀、澱粉の輸出の激增したのと、外國米の輸入の困難になつたのと、今年の端境期までには、今日の狀態を以てすれば、或は米は四五百萬石不足であるかも知れぬ。これが應救策としては、酒の釀造高を半減して、半搗米を食ふとか、代用食物を成るべく餘計に食ふ、或は早稲を多く作るとか、或は刈入れ調製を早めるとか、かういふ樣な應救手段もあらうが、これは暫く別問題として、今年限のことと故、如何なる大膽なる方法を取るも可い。然し將來の事を考ふる時に、我國は毎年七十萬人位增加する。米の需用は、毎年七八十萬石宛增加する。そこで耕地は十五萬町歩位增加する。であるから耕作の技術に何等の進歩がなくとも年々約三十萬石宛位は、産額が增加する。からして耕作の技術が進むか、特別なる奬勵手段をとりて、耕地の利用を增加し、開墾地を增加せねば、年々四十萬石宛不足額が增加する。それのみならず、過去十年間の平均によれば、殖民地から約二百萬石の移入がある。外國からやはり二百萬石位の輸入を要する。殖民地から食物を輸入することは、結構なことで差支は無いが、外國から食物を輸入することは、國民經濟を安定ならしむる道でない。特に米は小麥の如く、北半球でも南半球でも、また東半球にも西半球にも、多量に輸出し得る國があるとは違つて、この輸出能力を有つは、英領ビルマ、印度支那、シャムに限られてゐる。輸出し得る數量も極めて僅少である。故にこれらの國若くばこれらの國の他の領土に、凶何などのことあれば、忽ち輸入不可能となる恐がある。それで外部の輸入に頼るは不安心なることゝいはねばならぬ。故に一方に於ては、内地及殖民地の土地の開發に努めて、生産の方法の改良を計り、産額の增加を力めねばならぬは勿論であるが、我國では消費の方を顧みれば、年々最も善い日本米を、四百萬石以上を、酒の釀造に用ゐてゐる。ですから若し急に飲酒の習慣が止められないとしても、責めて之を半減すれば

直に米の不足の解決が付くのである。國民が米價の高い爲に生活に困難することの解決は直くに附く。益々人口の増加に伴ふ米の消費の増加に應ぜん爲に、少し今日よりも土地の開發に努力すれば、皺に容易く解決できる。故に今日酒を飲むことは、唯でも足らない米を、益々不足にして、米價の騰貴を助けることになる。若しその増貫、岡半等が、米を買占めて、米價を騰貴さして、細民を苦しめる奸商だと世間から非難攻撃されたることもあるが、けれども彼等は儲けたかも知れぬが、また賣出したので、賣出した時には、米價を下げたかも知れぬ。然し有害なる酒を飲む連中は、米を無益に消費して、食料を不足にして、米價を騰貴せしめ、細民を苦しめるものである。これは奸商の如く、米を賣出すことはなく、米價を騰貴せしめるのみで、決して下落せしめない。惡意は無いか知れぬが、事實細民を苦しめてゐると同時に、自身も大に害を受けてゐる連中である。

■各國の飲酒取締□

□飲酒國は國際競爭に劣敗す■

國際競爭の點からいつても、禁酒しなければならぬ。英國には禁酒教育に、非常に骨を折つてゐる。こは數十年來のことである。英の本國及びその殖民地に於ては、いづれも幼年者に酒類を販賣することを禁じてゐる。米國では今日では多數の州にては飲酒を禁じてゐる。加之禁酒の州は、益々増加してゆく。一方に於ては、憲法の改正によつて、憲法を以て酒を禁じようといふ運動が、極めて盛んである。近き將來に於て、その目的が達せられんとする勢がある。瑞典にては酒を飲むには、免許をうけねばならぬ、昨年まで飲酒の習慣ある者は、租税の滯納のなきもの、酒癖の惡くないものは、政府の免許を得て、蒸溜酒を一人一ヶ月四リートルを買ふことを許され、ビールや葡萄酒は自由であつたが、今年の一月一日よりは、ビールや葡萄酒も免許を得たものだけに限りて、一定の分量を買て飲むことを許すことになつた。そして飲酒の慣習を次第に絶滅する方針を取つてゐる。その他歐米の交戰國は、いづれも食料節約の目的で、酒類の製造高を制限し若くは酒類の製造を禁じてゐるが、戰後といへども、尚一二年の間は、食料品は不足である。また家畜の改良も不足である。殊に減少した家畜の數を戰前の如くに恢復せんには、尚當分の間は、食料及飼料不足であるから、酒類の製造高の制限は、戰後と雖も、尚ほ繼續するであらう。また戰前でも英國や獨逸では禁酒運動は、極めて盛んであつた。また戰後經濟力の恢復を計る必要から考へても、戰爭中に食料節約の爲めに始めた節酒の慣習は、必ず之を維持するを力めるであらうと思ふ。故に今後國際間の競爭を考ふる時に、我國だけが安閑として酒など飲んでゐては、駄目である。一方に醒めた國民がある故に、我國のみ人種の衰退を招くことになり、國際競爭は失敗を免かれぬ。阿片とか、モルヒネは例へば虎列刺やペストの如きもので、其害毒は劇烈なれども、それだけ人は注意する故、此害を受けるものは、少數の範圍に止まる傾がある。飲酒の惡習慣は、害毒の感染は緩漫なれば、注意を怠り且つ脫却し難いと、肺結核の如く其害毒は國民一般に及ぶ惧あれば、力を協せて、此國民病を排除しなければならぬ。

編輯之後

▲明けまして御目出度う、先づ編輯局から會員諸君の御健康を祝し、今後層一層の御同情と援護を祈ります

▲昨今の社會の進歩はどうでしやう。急轉直下ですね。日本の中でも禁酒案が政府の手で出んとし、選擧權の擴張が行はれんとし。教育の大擴張が施されんとし、勞働問題が八釜しくなり、川崎造船所の如きは、職工を株主にして了つたなどは、眞に驚く可き進歩ですね

▲併し其中にあつて常に舊思想の反抗があるのは遺憾です。逆襲權も煮え切らず、內務省に於ける勞働問題研究も、結局我國には主從の關係があるの、温情主義のといふ事に歸して了つた。之は丁度婦人問題に於ける家族制度の維持と好一對で、時代を達觀し得ざるにも程がある。家庭工業には多少主從的關係もあらうが、今日の會社工場に於て何處に主從的關係などがあらう現在は家庭の女中ですら、利害關係以外に何もなく、職工は給金の多寡によつて動いてゐるだけのものである。奴隷的偏見、所謂オートクラシーの域を脫し得ざるは悲しむべき事です。

▲佛教社會事業研究會は、此程米なしデーの實行を政府に請願したが、萬朝報の一口噺子は之を嘲つて、そんな事をするより、坊さんが酒を飲むのを止めれば、米は下ると云つた。甚だ酷評のやうであるが、宗教家なるものが禁酒を宣言し得ざるは遺憾である。米なしデーなどを請願するよりも、酒の釀造を廢止又は制限する方が、適切であり、必要である。

▲今度吉原の樓主連が慈善的な組織し、二萬圓の豫算で託兒所を設け、保姆を雇つて勞働者の幼兒を無料で養育し、寄邊なき廢業娼妓も引取り、市內の商店工場とも特約して內職を授け、裁縫も仕込み、相當の配偶者があれば結婚媒酌の勞も取り、更に濟生會と連絡し所屬の看護婦は細民の多い町內を巡り、病人のあつた場合は濟生會の診察を求めしめる。

▲會員は絹布を廢し綿服と定め、金指輪も一個以上は認めず、金時計は銀時計に改め、世間に有り勝な虛榮を一切廢し、芝居見物なども止め、香典返しなども寄附して會の維持費に當てる計劃で、總ては理想的な簡易食堂も設け、中產階級を救濟する。と號してゐる。

▲石が流れて木の葉が沈むとは眞に此事である。中產階級以下の膏血を絞り取つて、そして一方に慈善を叫ぶ、矛盾も亦甚してあるが。彼等如き亡八連にのさばられて、救濟事業を汚させることは、眞に社會の恥辱であると思ふ。

▲新年匆々の御詫は甚だ感服しませんが、同人の宮地君が寒冒で寢込んだので、特別號の計劃を一人で立てて一人で實行しなくてはならぬ事となり、本職の方も年末で忙しい處を、無理に強行し、新裝を凝らして諸君に見えしむる事とした樣な次第で、從つて發行遲延ともなつた點は、何分の御寛恕を願ひます。

▲僅々八錢の會費を以て、六十頁四六二倍版の雜誌を出版したのでは、半分は損失である。從つて二月號を休刊して丁度いゝ譯であるが、それでは興味を失はしむるから、二月號は二十頁位のものと御承知を乞ふ。

▲何しろ一九一九年といふ年は歷史を劃する年だと我等は痛感してゐますので、諸君の鞏固なる團結の力を以て、我國人文の爲め貢獻したいと考へてゐます。雜誌なども定價八錢で出來るやうな貧弱なものでは面白くない、少くとも今月號か、先達ての『遺傳と環境號』位の厚さと內容とを有せしめたいのです。編輯者としては三十頁位の雜誌の編輯は興味がありません。併し紙代は四倍にも上つたのですから、せめて半額に低落して呉れると、四十八頁位にはされるでしやうが、會費はせめて十錢にしたいものだと思ひます。外にトラクトの出版や、演說會講演會等の費用もありますから八錢ではね。

▲從來地方支部等から辯士派遣の申込が澤山あり乍ら其半分も實現が困難でありましたが、今度益富理事が歸省せられたので、地方講演の方は可なり御希望に副ひ得るでありませう、益富氏は歸朝以來內務省、鐵道院、早稻田大學其他、每日々々講演ばかりして歩いてゐます。其得意の辯舌は、新見聞によつて一層光彩を放つて、到る處好評でありますが、一月中旬に、豐橋市の特志家たる木藤冷劍君主催で、同所に廓淸演說會を、更にまた濱松支部にても演說會を開かるゝ筈である。

▲秋田縣橫手町の澤田松太郞君は、愈々同所に本會支部設置の大運動を起し、既に着々成功の報道を得つゝあるから、大阪支部に次ぐの大支部が設置さるゝであらうし、さうなると本部からも大擧して辯士を派遣することにしたいと、意氣込んでゐます。

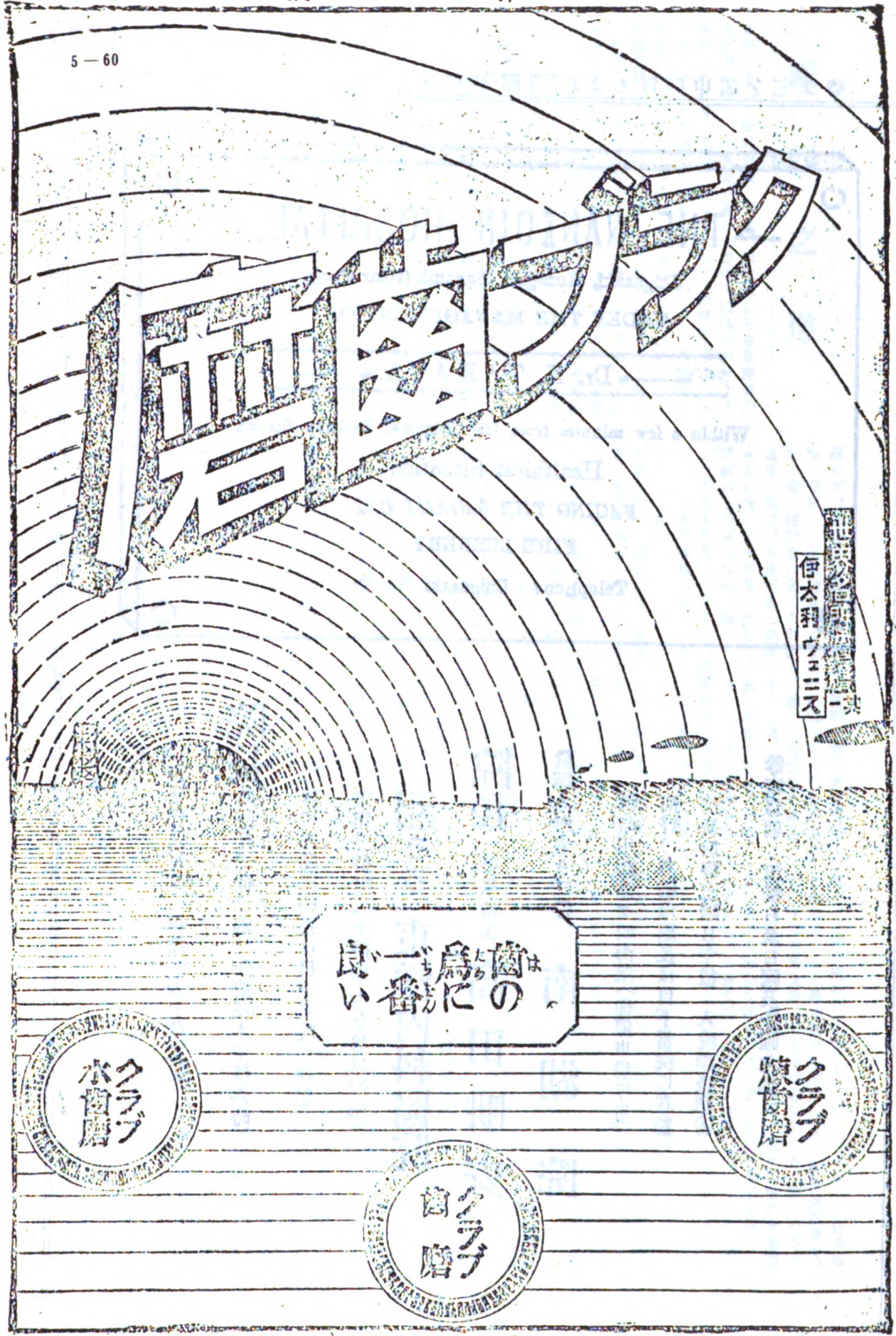
▲長野縣にありて熱心風敎問題に盡瘁せられ、本會支部設置の中心人物たる林正營氏の御活動は、我等の平素感謝しつゝある處なるが、昨秋支部發會式擧行に就き辯士の御交涉ありたるを、小生が歸鄉中なりし爲め其儘にしたるは甚だ殘念でありました。今春こそ是非其の實現を見るやう致したいと思つてゐます。

▲先般來御寄稿御投書下された原稿が澤山ありますが本月は御覽の通り澤山の頁數を費したので、此上掲載する事が出來ませんでした。二月號もなるべく頁數を減じたいと思つてゐますから、三月號以後に於ては、大に歡迎し、諸君の氣焰壇場を擴張したいと思つてゐますから、唯今から續々御寄稿を願つて置きます。

▲同志の入會御勸誘を切望します。

大正八年一月十五日印刷（每月一回十日發行）
大正八年一月十五日發行　一部定價金二十錢
編輯兼發行人　神田區今川小路一丁目三番地　伊藤秀吉
印刷人　小石川區大塚窪町一番地　久保民生
印刷所　本鄉區眞砂町三十六番地　三光堂
發行所　神田區表猿樂町十番地　廓淸會發行所
電話本局四〇三五番
振替東京二七〇七二番

大正八年十一月一日第三種郵便物認可（毎月一回十日發行）



大賣捌所　東京堂、東海堂、上田屋

一部定價本號ニ限リ金二十錢